# ▲再版出來○○○

●卿は全國の新聞の批評を見しや　△本書に對する△

大僧正 本多日生 著

**法華經講義** 全二冊

▲洋裝菊版總布上製函入美本
上卷 壹圓八拾錢（壹千頁）
下卷 壹圓八拾錢（壹千頁）

●各券分賣す
●二冊の小包料（內地二十錢、滿洲朝鮮五十錢 臺灣樺太四拾錢）
●一冊の小包料（內地十二錢、滿洲朝鮮四十錢 樺太臺灣三十錢）

大僧正 本多日生 著

第一版、二版三版忽ち賣切 四版

**日蓮主義**

三五判洋裝金文字▲天金縁函入美本▲紙數六百二十餘頁
▲定價九拾五錢 郵税六錢

▲宗教の必要と其撰擇▲儒佛三教と日蓮上人▲國民道徳と宗教の信仰▲破佛論に對する批判▲統一的佛教觀▲釋尊の出家成道▲佛教信仰の體系▲法華經壽量品▲日蓮主義の梗概▲修法次第▲方便法▲自我偈▲自調▲本統祖文要文

●賣り切れざる中に申込あれ

申込所 東京市小石川區白山前町 統一編輯所 振替口座東京三三五三三番

---

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木（直に御聯想下され候儀に候）

京都 三條通烏丸東入ル町
**草木本店**
電話中七三五番
振替口座東一一五五九番

東京淺草區三好町二番地
**草木支店**
電話下谷三四三四番
振替口座東二四五六八番

---

東京市日本橋區坂本公園入口
加賀料理 **加能亭**

---

念珠　念珠

日蓮各宗本山御用達
京都市寺町通六角西南角
念珠商 **安田商店**
振替大阪三四二一五番

二百數十年日蓮各宗の念珠を商ひ來り候老舗に候御信用の上御用命願上候

---

日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達

# ●御念珠 各種

弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候

京都市寺町通蛸藥師下ル
念珠商 **小野嘉助**
電話中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

念珠ならば小野嘉助店へ

---

**圓頓章講義** 四十五錢 送料八錢
統一編輯部 振替東京三三五三三番

---

●●街も肆佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●●

**佛像佛具 位牌木鉦** ●●●調度所
宮殿幢天蓋其他一式
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈

總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團
**御用達**

舊名『乾清』事
大佛師 **辻井岩次郎**
京都寺町四條南大雲院前
振替大阪八一一五七番
電話下三二五八番

多少に限らず御用奉願上候也
●●御用仰せ渡下候はゞ叮嚀深切を旨と致候●●




▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所（▲本誌定價一冊八錢郵税五厘▼）
發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄
明治三十年十二月二十四日第三種郵便物認可 大正六年六月十五日發行（毎月一回十五日發行）




（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）


明治三十年十二月二十四日第三種郵便物認可
大正六年七月十五日發行（毎月一回十五日發行）


# 第廿一年 統一 七月號

（第二百六十九號）

修養と日蓮主義……大僧正 本多日生
本尊に對する意義……石橋會章
我日蓮主義……海軍中將 佐藤鐵太郎
機微譚語……山根青村
課題和歌『夏池』發表……子爵 清岡長言 選

佛法の根本は信を以て源とす、されば止觀の四に云く、佛法は海の如し唯信のみ能く入ると、弘決の四に云く、佛法は海の如し唯信のみ能く入るとは孔丘の言尚ほ信を首となす況んや佛法の深理をや、信なくして寧ろ入らむや、故に華嚴に信は是れ道の源功德の母等と止の一に云く云何が圓の法を聞き、圓の信を起し、圓の行を立て、圓の理を證す、弘の一に云く、圓信と言は理に依て信を起す、信は行の本と爲す云云外典に云く、漢王は臣の說を信ぜしかば河上の波忽ち氷り、李廣は父の讎なりと思ひしかば草中の石羽を飮むと云へり、所詮天台妙樂の釋分明に信を以て本とせり、彼の漢王も疑はずして大臣のことばを信ぜしかば立波こほり行くぞかし、石に矢のたつ是又父のかたきと思ふ至信の故也、何に況んや佛法にをいてをや、法華經を受持ちて南無妙法蓮華經と唱ふる卽五種の修行を具足するなり此事傳教大師入唐して道邃和尚に値ひ奉つて五種頓修の妙行と云ふ事を相傳し給ふ、日蓮が弟子檀那の肝要是より外に求る事なかれ。

（日蓮上人遺文日女抄）


發行事務取扱所 東京小石川白山前町 統一編輯所
▶振替口座東京三三五三三番◀

△和歌題課（〆切七月末日）『法師』投稿規定

一紙用半紙半切

一書方一題一人三首迄とす。字體は正しく認め一枚毎に必ず住所姓名を記すべし（他用書くべからず）

滄溟安井正太郎君藏　松尾皷城筆

關會開延身

東洋織物新聞社藏　同人筆

釣人催眠

# 『統一』第廿一年七月卷（第二百六十九號）

■差迫りたる宗教家の實行　『宗教家は宜しく實行せねばならぬ』『口て言つて居たのでは駄目だ』これは世間から宗教家に對する批評であつて併せて要求てある。しかし今日の宗教家の爲すべき仕事は、第一に口輪の運轉である、即ち主義の宣傳を講述し演舌することに於て座臥常に離れないことであると思ふ。それが即ち宗教家の所謂實行であると思ふ。意の把持は信仰の一念であらねばならぬが、其實行として現はるゝ仕事は筆舌の布傳を第一初頭の行爲として起さなければならぬと思ふ。佛事供養に葬儀に、讀經と儀式と法衣と殊勝の裝ひとに三百年の見榮を張つて來て、宗教家とは出家遁世した亡者の葬ひ役、墓を守る人、寺塔の番人と見られて居るときに、宗教家とは活世界の救濟者であることの由を説いて〳〵て説き切る事が今日に於ては所謂宗教的實行であると思ふ。其實行に附隨して起る、因襲より起る反對、迫害、諸種の困難等があつて、之れが排除に盡すのは、この演舌實行の附帶産物に過ぎぬのである。今時の仕事は小瑕に即功紙を貼符して濟ました和尚を裝ふよりも、拙でも何でも隨力演述で口角飛沫して笑はれる方が主義實行の偉者だと思ふ。口て言づて居たのでは駄目だてはない、口で述べて〳〵述べ切るところに信念の發露があり、而してこれが僧伽の實際の行務であると思ふ。

■小鳥の啼聲　釋迦尊の一番忌み嫌はれたのは懶惰である、懈怠であるとは經典を引證しつ

丶常に說かれて居らる丶本多主任講師の吼哮である。されば師自己は絕へず努力を傾倒して主義に執務しられて居られる、しかし如何に精力家といつても師も亦『人』である、時に疲勞し病腦することもある。師頃日曰く『經に禽鳥の美聲を揚歎し、法緣に淺からざることが說いてある、しかし自分は未だ之れを實際には解さなかつた、然るに一日筆耕に疲れや丶呆然たるの時、小鳥枝に宿つて囀啼するを聽いて、忽ち恍惚焉として一涼の淸味を覺え、惱痛は即時に忘れることを得た、初めて一囀鳥の力も自己の趣味會得の向上に依つて不思議の靈力を感銘することを知り、併せて世尊が一小鳥の囀啼にも法の攝妙を馨しておいでになることに敬服する』との事であつた。松永貞德句して『法花經ぞ鶯はよき聲で候』正直は『靈山で聞く鶯や生佛』何れも鳥の聲に佛性の動いたことを吟じたものであつた。

■觸向對面眞趣の味　『暮行空の雲の色、有明方の月の光までも心を催す思ひなり、事にふれおりに付ても後世を心にかけ、花の春、雪の朝も是を思ひ、風戰ぎ村雲迷ふ夕にも忘るゝ隙なかれ』とは持妙法華問答鈔の一節である。啼鳥の聲、一彈の琴、詠歌吟句、山川風雨、何れにか心を催し思ひをそゝらざるものがあらうか。一瓶の挿花一喫の茶味。これが善であり美である感興の反響としていは奚ぞ眞法の一助でないものがあらうか。

# 修養と日蓮主義

本多日生

## 一、緒言

近來修養の盛聲んなるは、國家の慶事なるも、現代は生活上の壓迫益々加はり、社會狀態の複雜を極むるに隨ひ、世人の多くは、目前の利益を追及し、其處に紛糾錯雜を來たし、或は煩悶に陷り或は險惡に傾き、人心を刺戟する事の日に多くして、尋常一樣の修養方法に依つては、其の實效を收め難し、又尋常一樣の修養談は世間其の人に乏しからず、雜誌に新刊書に、續々世人の前に提供せられつゝあり。されば予の こゝに語らんとするは、此等普通の修養談にはあらず、最も强烈なる感動力を有し、又現代に處して建鬪力を發揮せしめ又外界の物質を超越して油然として自慶法悅に生くる效力の偉大なるものに就て語らんとするのである。この著想の下に最善なるものを求むれば、予は日蓮主義を最先に推薦せざるを得ず、この意義に於てこゝに修養と日蓮主義の講述を試みんとするのである。

## 二、日蓮主義は强大なる感動力を有する事

修養の效果を擧げんとするには、感動力の强大なるものを撰ばざれば、現代人をして向上せしむること能はず、人心に感孚する所なければ、人格の缺點を補ふてその長所を發揮せしむること能はず。吾人人類は本來善良なる性能を有するもこれを自然の儘に放任すれば、遂にその靈光を發揮し得ざるのみならず、吾人人類の性質には他面に劣等なる物欲を併有するが故に、人は向上の心懸なき時は、必ず墮落を免がれ得ないのである、故に强烈なる感化を與へて、固有せる善性靈德を感孚せしめねばならぬ。而して日蓮主義は確に强大なる感動力を有し、これに接觸する者をして愕然として奮起せしむ、この意義に於て修養上日蓮主義は最も有效なるものたるを信ずるのである。

儒敎の方に於ては、陽明學は頗る感動力に富めりと稱せらる、陽明學に於ては、知行合一を旨とし、主一無適を說き、實際の工夫を敎へ、六經は悉く我等が實行の註釋書なりとし感動感孚を以て學說の歸趣と爲す、されば古來この學派に屬する人は、剛健の志氣に富み何等かの事業を活現する有爲の人物を輩出したのである、而して日蓮主義は佛敎中に於ける陽明學とも云ふべく陽明學は儒敎中に於ける日蓮主義とも云ふべきである、由來日蓮主義は日蓮聖人の人格と敎訓とに根據し、聖人の事蹟と遺文とに由つて强大なる感動を與へらるるのである。偉人の事蹟は往々にして廢絕に歸し、又地を隔つること遠くして親しく跋涉し難く、又偉人の敎訓は多くは

散逸して、後代に傳はれるものには、後人の作爲ありて眞僞を確め難きもの多し、然るに日蓮聖人の事蹟に至つては、歴然として現存せるのみならず、帝都に接近せる地方に存し、房州、鎌倉、身延、伊豆等に散在し、一日程にして親しく歴訪するを得べく、而してその事蹟は、何れも正義の爲の健闘を語り、窮困の境に處して靈力を活現せしことを敎へざるは無し、その遺訓に至りては、眞蹟の大部分は中山法華經寺に現存し、今や眞蹟帳なるもの發刊せられ、何人も親しく直筆に接するを得て、人格的の感化を享受するを得るなり、而もその敎訓は、趣旨透明にして頗る多方面に亘り、又熱誠ある心血を灑いで記るされ、一種の勁句に富み、一讀の下人をして感憤興起せしむるのである、聖人の事蹟は古今に卓絶し、一般宗敎家の追隨を許さず、法を知り國を思ふの志は千古を照し、思想の統一を叫び、國體の顯揚を唱へ、我國家の天職を明かにし、萬人に安宅を得せしめんとす、その思想の明確なる點に於て、その抱負の遠大なる點に於て、その熱誠の卓拳たる點に於て、その慈愛の深厚なる點に於て、偉人傳中に傑出せるを見るべく、殊にその奮闘力に至つては、現代の模範人格として何人も敬慕せざるを得ないのである、この剛健奮闘の精神は、吾が國民性の眞髓にして、民心に感孚するに於て、最も緊要の事に屬す、吾人一たび鎌倉に到り八幡の社前に詣でんか、日蓮聖人が當年斷頭場に向はんとして、暫ばし馬を止め「いかに八幡大菩薩は誠の神か。和氣の清麻呂が頸を刎ねられんとせし時は、長一丈の月と顯はれさせたまひ



傳敎大師の法華經を講ぜさせたまひし時は、紫の袈裟を御布施にさづけさせたまひき。今日蓮は日本第一の法華經の行者なり、其の上身に一分のあやまちなし、日本國の一切衆生の法華經を謗じて無間大城におつべきをたすけんがために申す法門なり、又大蒙古國よりこの國をせむるならば、天照大神正八幡とても安穩におはすべきか一と言上せし光景を追懷せば、聖人が正義に對する信念の如何に鞏固なりしか、國難を憂ふる愛國心の如河に切實なりしか、法華經の功力を認むることの如何に正確なりしか、神明の鎭座を信ずることの如何に誠實なりしかを思ふて、感激せざるを得ないであらう、又去つて由井ケ濱邊に出づれば、聖人が法と國との爲に捕はれの身として痩せたる馬に乘せられ、三百人の兵士甲冑嚴めしく取り圍みて、この處を引き行きしことを思ひ、その光景は如何にありしか、聖人の心事は如何にありしかに想到せば、泣かざるを得ないであらう。又片瀨龍の口に到らば、今尙ほ殘れる敷皮、頸の座の遺蹟を拜して、當年この處に於て顯切られんとしたまひ、左衞門の尉の嘆きし時は「不覺の殿原かな、これ程の喜を笑へかし」と最後の敎訓を與へたまひしがその時の光景、その時の心事は如何にありしか、江の島の方より光り物鞠のやうにて辰巳の方より戌亥の方へ光り渡る、太刀取目くらみ仆れ臥し、兵士共恐れうめきて馳せのき、或は馬よりおりてかしこまり、或は馬の上にてうづくまる、この時に聖人は、頸切るべくはいそぎ切るべし、夜明けなば見苦しかりなんと仰せたまひしも、返事すら爲す者なかりしと云ふ、その光景如何に悽慘なりしか、又崇高なる靈氣この場に滿ちて、人々は如何に驚愕せしか、又聖人の犧牲献身の覺悟は如何に勇ましかりしか、一點世俗の欲望あるにあらず、唯だ偏に法を思ひ國を思ひ人を思ふて、正義の主張を枉げたまはざりし爲に斯くの如く斷頭場裡に引据へらるゝに至り、而も泰然自若として毛髮も卑怯未練の態度なかりき、この場の光景を追憶しては、誰か復道の尊ぶべく志の枉げべからざるを感ぜざるものあらんや、彼の物質欲の爲に道を忘れ義を捨てゝ、名利の奴と爲り、容易に反省の心を有せざる者も之を思ふては感動感孚を起さざるを得ないのであらう、更に去つて伊豆の篠見ケ浦に俎岩の激浪に洗はるゝを見、又往いて佐渡の島根に積雪擔を沒するを見て、聖人の當年を回顧すれば、其處に深大なる感動感孚を生ぜざるを得ないであらうその事頗る清くその狀極めて慘なり、これ感動感孚の力を有する所以である。

又聖人の文章に就ては、國文として一種の異彩を放ち、平安朝時代の柔弱なる文章に比しては、確に我が國民性を嚮導するに足り、彼に勝ること數等なるを見るべし、而して前に云ふが如く、其の文章は机上に筆を執りしにあらずして、流離困頓の間に處して實驗せる所を、率直に記るされたるなれば、生氣潑溂たるものあり、且つ又文藻に富み警句口を突いて出づるの有樣なれば、苟も聖人の文章に親む者は、異常なる感化を受くるのであり、古來この感化力の強きは言ひ傳ふる所である、中古異宗派の者聖人の折伏を防禦せんとして、その宗内の僧侶をして聖人の遺書を研究せしめたることありしが往々にして、その主張に感化せられ、遂にその宗派を去つて聖人の敎義に歸依するに至りしと謂ふ。曾て内村鑑三氏は、聖人の熱烈なる言論に遇ふては、敵たらずんば味方となり、味方たらずんば敵となる、決して聖人の門前を素通りにするを得ずと言ひしことあるが、面白き批評なりと思ふ。又近時村上博士が聖人の敎義を研究するの志を發表すると同時に、聖人の主義行はるれば他の主張は並び立つを得ず、他の主義行はるゝも、聖人の主義は亡ぶるものにあらずと言ひしが、氏の意志に於ては何を意味するかは知らざれども、是れ亦聖人主張の力の强きを證するものと見て可なり。

元來精神修養には一種崇高なる喜悅を伴ふを要す、これを自然の美に求め、又は道德的感情に求め、宗敎的法悅を求むるを要す。曾て白州樂翁公は、花の紅、松の綠、能く能く味ふべしと言はれしが、自然の美に接する時は、その感興を向上せしむるやうに導くべきである、而して聖人の人格中には斯の美の感情、善の感情、法悅の感情は、頗る理想的なる發達を示せり、この偉大なる人格は、聖人の活動に於ける事蹟と、心血を濺ぎたる文章とに於て、遺憾なく吾人を感化し得るのである。斯くて聖人の感動力の强大なると共に、その感化する事柄の如何にも現代の時弊に適中せることが認めらるゝのである。

## 三、日蓮主義は大いに健闘力を養はしむる事

現代の修養には、建闘力を旺盛ならしむるを以て、重要なる目的と爲さねばならぬ、若し建闘の力を失はゞ、現代に於ては落伍者たらざるを得ず、何等の事業も成就することは難いのである、而してこの建闘力を旺盛ならしむることは、日蓮主義に於ては特色中の特色とする所にして、聖人一代の事蹟は、全く健闘の記錄に外ならず、この健闘の力は一面大なる法說自慶の修養より來つて居るのである、普通人の勇氣は目前の名利を捉へんとして、起るものなれば、若し目前の名利を握り得ざる時は、失望の淵に陷りて意氣銷沈し、若し名利を捉へたる時は、一時の滿足に心緩みて、直に墮落の傾向を生ずるのである、修養の價値は、淸き目的に於て健闘力の旺盛なるを尊ぶべきものにして、此の點に於て日蓮主義は、修養上に偉功を奏せしむるものである。或る商人が語るには今の奉公人は自利心のみ高まり、自己の所有に屬するものは五錢の白銅一個を失ふも大騷ぎをなす、されど主人の物は貴重なる物品を損じ又は失ふとも、毫も意に介せざるもの〻如し、斯くて多數の奉公人を使用する商業は、頗る不安に陷らざるを得ないと、この主人の述懷は現代の通弊を表白せるものと謂ふべく、斯くの如く自利心のみ高まりては眞の健闘力を養ふことは、斷じて出來得ないのである、道德の價値は自利心を卑しとして、利他の志を懷くに在り、この利他の中には、家庭の爲にも、主人の爲にも、會社の爲にも、團體の爲にも、社會の爲にも、他人の爲にも、國家の爲にも、人類の爲にも、道の爲にも、永久の爲にも貢獻する所の精神を養ひ、この淸き目的を果すが爲に健闘力を要するのである、自利に走る者は健闘の力なし、假りに之れありとするも、前に言ふが如く、直に失意に陷り墮落に傾いて、到底終りを全ふするものでない、この意義に於て淸き健闘力を修養せんとするには、日蓮主義に感孚するを最善なりと信ずるのである。

日蓮聖人が旭ケ森に於て所信を發表し、淸澄寺に於て法輪を轉ぜし時、忽ち地頭景信の反對を受け、爾來年として惡辣なる反對を受けざるはなし、然れども旭ケ森に於て誓ひし精神は終始渝ることなく、艱難に遇ふ毎に益々勇ましき健闘を續け、月の滿つるが如く潮のさすが如く、曾て退轉せしことあらず、その勇猛なる決心奮闘の事蹟は、心ある者の感孚せざるを得ない所である。彼の維新の志士藤田東湖は正氣の歌を作りて剛健の意氣を示し、又神州の正氣は共に獄理に在りと信じ、我れ汝と離るゝに忍びずと言るが如き、宗教的の情操を有せしも、尙ほ且つ時には意氣の銷沈するありて、其の間に作りし詩は後に破ぶり捨てし事ありしと云ふ、これに比して聖人は前後三十年間の奮闘史中、曾て一たびも斯くの如き悲觀に沈みしことあらず、聖人の佐渡に流さるゝや、配所に在ること前後四ケ年なり、三昧堂の光景は如何、聖人書して言ふ、「洛陽の蓮葉野のやうに死人を捨つる所に、一間四面なる堂に佛も無し、上は板間合はず、四壁はあばらに、雪降り積りて消ゆることなし、かゝる處に敷皮打ち敷き、簑打ち着て夜をあかし、日を暮す、夜は雪雹雷電ひまなし、晝は日の光もさゝせたまはず、心細かるべき住所なり」と、斯かる





悽慘なる境遇にありしにも拘はらず、聖人が最蓮房に與へし遺文を見れば「過ぐる時刻もほどあらず、世始まりてより御勘氣を蒙りて流されしもの多からんも日蓮ほど悅び身に餘る者は、よもあらじ」と言へり、深き修養の根底あるにあらざれば、奚んぞ斯くの如くなるを得んや、後に赦免を得て鎌倉に歸りても、意氣毫も衰ふる所なく、正義の主張益々堅し、聖人の主張は頗る剛强を極め、飛ぶ鳥をも落す鎌倉幕府に向つて「隱岐の法皇は天子なり、權太夫は民ぞかし」と喝破せり、聖人の迫害は正しくこの勤王の主張に起因す、鎌倉幕府の評決に曰く、日蓮は事を佛法に寄せて、政道を紊る者なりと、聖人勤王の一志、護法の道念、一難を經る毎に益々高まれり、この淸き目的に於て彼れが如き剛健なる奮闘を續け、死地に入ることその幾回なるやを知らず、而も潮のさすが如くに退轉せず、されば聖人の事蹟を追回し遺文を拜見すれば必ずや大なる健闘力を養ひ來るのである、聖人滅後日蓮主義の行者が、如何にこの氣魄を感孚し得たりしか、今これを盡す能はざるを遺憾とするのである。

## 四、日蓮主義は何人にも法悅自慶の心を得せしむる事

人は健闘を續くるに當りては、必ず他面に精神的の慰安を要す、淸き高き愉悅、即ち外界の物質に依らずして、精神的に自慶の光を有せねばならぬ、然らざれば健闘の力は枯れて忽ち薄志弱行の徒と化するであらう、自慶心とは讀んで字の如く、自ら自己を慶することにして、理想の喜び信仰の光に生きて、金剛鐵石の眞樂を保有するを云ふ、元來修養には喜悅の伴ふを要し、その終局は一種の淸き心的愉悅に達するを尊むのである、例せば論語の開卷第一に、「學んで時に之を習ふ、亦悅ばしからずや、友あり遠方より來る、亦樂しからずや」と言へるは、修養には喜悅の情の供ふを敎へしものである、又「心廣ふして體胖なり」と言ひ、又「夫子の燕居するや、天天如たり申々如たり」と言へるは、修養の完成を示せるものにして、これ皆自慶心と修養との關係を語るに外ならず、而してこの自慶心の修養に關しても亦日蓮主義は頗る偉功を奏せしむるものである、聖人は前に述ぶるが如き迫害多難の生涯を送られしも、終始自慶の幸福を享受せられたのである、聖人の文章を見れば、幸なる哉と言ひ、悅ばしい哉と言ひ、大に悅ばしと言ひ、悅び身に餘まると言ひ、悅びの涙瀧の如しと言ひ、第一に富める者なりと言ひ、其の他喜悅を表白するの言辭、全篇を覆へり、聖人に對する外形の艱難は古今その類を絕すと稱せらる、而してその法悅自慶も亦その比を見ず、聖人自ら言ふ、難を忍ぶに於て肩を並ぶるものあるべしとも覺えずと、又言ふ、日蓮ほど悅び身に餘まるものはよもあらじと、この二句は聖人の一代を經緯せる聖訓なりこゝに日蓮主義が現代の如き壓迫多き世に處して、自慶心を練らんとする者に取つて、唯一の好師友好侶伴たるを知るべきである。

物質より來たる慰安は、その質粗惡なるのみならず、時間

の繼續頗る短少にして、極論すれば瞬間の快樂に外ならず、試みに美味を樂むとせんか、舌頭二寸の中に味覺を感ずる所は頗る僅少にして、一嚥下すれば復再び味ふべからず、肉欲の追求はこれに伴ふて幾多の苦痛を生じ、所謂「行欲は唯だ一種の患のみに非ず、諸の過惡多くして利益無し」と說かれしは、我を欺かざるなり、されば初めに言ひしが如く自然の美に對する感興を養ひ、道德的感情を高め、宗教的慰安に生きて、こゝに法悅自慶の光りを得るは、吾人が修養上の秘訣なりと謂ふべきである。聖人が「女房と酒打ち欲んで南無妙法蓮華經と唱ふべし」と言ひ、「五節供の時、南無妙法蓮華經なるべし」と言ひ、「立ち渡る身のうき雲も晴れぬべし妙の御法の鷲の山風」と謳ひて、大安樂の境地に逍遙せられしは、確に自慶心を得んとする者の憧憬し感孚すべき所である。

自慶心を有する者は、懷の內に鶯の聲を聞くが如く、外界の事情に由つて心內の喜悅を失はず、精神の光りに由りて人生を幸福化するのである。

日蓮主義と修養の關係に就ては、更に進んで日蓮主義は各種の倫理を調節し、且つ實行の活力を賦與するものなるを明し、又日蓮主義の敎化はその根抵に頗る堅實なる基礎を有し各種の思想を選擇するに當りては、頗る明晰なる解決を與ふるものなるを明し、斯くして修養と日蓮主義との關係を講了せんと欲せしも、これ等の條項はここには略することゝなりぬ。（完）

（一枚は）本日陰曆立宗會に相當に付地明會講演會を幹事阿部秀三君宅に開き日蓮主義鉾先當るべからず頗る盛んに御座候（六月十七日）

（一枚は）當番幹事として本日出席會員に署名を乞ひ統一に敬意を表し候

（阿部秀三）

鈴木新吉
菊地軍平
菅原萬藏
伊藤和治
登坂龍郎
西專藏
高杉要三郎
宮田菊次郎
井澤舟五郎
中村謙藏
海老名彥八
阿部秀三
鈴木養吉
高坂貫一
北田重美
高木護明
尻谷源次郎
渡部正治
廣澤芳次郎

（繪葉書は奧州松島の景なり）

（青森地明會講演會よりの繪端書）





# 我日蓮主義

佐藤鐵太郎

本講演は七月一日統一閣に於て述べられし所、記者が要領筆記にして未だ校閲を經ず故に誤りたるところは記者の責任なり。

## （一）緒言

暑さの時でありますから餘り理屈に入らない程度でお談して見たい。此の場合『我日蓮主義』とは融通の利く題であつて、從つて纏つた說ではない、主義上感じたところを隨意に氣樂に、述べさして貰ふのであります）

## （二）間違つた解釋

所謂『我が』日蓮主義である、私が感じ得て居る日蓮主義に就てお談してみたいのである。凡そ物は觀察に依つて感じ方が違ふ。此間或人格ある人の求に依り下手な書をかいて需に應じた、其文句は日蓮上人の『極樂百年の修業は穢土一日の功に及ばず』の聖語であつた。これは此の世の中に於て至難の中に善業を營み又妙法修行の功德を積んでをかねば極樂に往ても何の功もない、人は此世に於て人としての盡すべきに盡さなければならぬといふ上人の御精神であるが、其の書物は仲介者の手から本願寺の信徒で熱心な婆樣の手に渡つた、此の婆樣大に喜んで誰彼に見せる、中にも或和尙に見せたところが、『此世では信心するより有がたい事はない、世の中で仁儀禮智信は小善である、阿彌陀佛の名號は一遍唱へても極樂に往ける、斯ういふ文句である』と解釋をした。同じ敎でも說明式で大きく違つて來る。昔し盜碩は飴を以て盜用に便利であると思ひ、孔子は老人を養ふに宜ろしいと云つて欣んだ、私の日蓮主義の文句も念佛の事だと解されたのである。頃日の新聞には日蓮主義の書物が澤山廣告される、しかし今の如く見方に依つては大きに相違がある、故に日蓮主義と云へば同じ事でも氣を附けねば間違つた方に落込むかも知れぬと思ひます。

## （三）釋迦に對する觀念

釋迦如來は大へん緣起の善いお方である、釋尊は家を逃げ出したのではない、世を救ふ爲に種々難行苦行もなされたのである、世を救ふには自ら先づ覺らねばならぬ、此故に道を悟るべく勇氣を持して奮勵修行せられたので、釋尊が世をはかなんで山に逃げ込んだなどゝ考へるのは大へんな違ひである。釋尊一代の事蹟は私の見ましたところでは邇れば是れ頓て日蓮主義である、又日蓮上人の事蹟は釋尊の事蹟である。世に釋尊の出家御修行に對して間違つた見方をして居るから

佛教が厭世教となつたりするのである。

### （四）暑の感じと宗教

夏は暑い、この暑いといふに就ても考へやうで大へんの違ひがある。幾ら暑くとも行儀よく禮儀も正すと云ふものもある。又幾ら暑くとも涼しいと感ずる、さうすると自然と涼しくなると云ふものである。又我法力を以て八十度の暑さを六十度に引下るといふものもある。又日中は暑いが夕方になれば涼しいと云ふものもある。又夏は暑い、暑いけれど日中はよく働いて、夕方になれば晩酌で夕食も探るといふ。同じ暑さに對しても種々に考へが違ふ。此暑さに對する思想を宗教に比較してみると、暑くても只辛抱するといふ之を律宗の坊さんと見る、酒なども飲まずに戒律を保つ（事實は如何か）といふ。又暑いのも心頭滅却すれば火も亦涼しなどゝ意氣る之は禪宗であらう、だが悟りながら汗だく〳〵のもある。又八十度を六十度に引き下げる抔といふは眞言秘密の法であらう。此の眞言秘密の類似は日蓮宗にも無いでもない、善い所はせずに質の惡い所で世を迷はすのもある。念佛宗は暑いが只涼しくなるのを待たうといふ。最後の暑いのは仕方がない暑くても氣を張り職業に出精して大に働き晩が來れば晩酌でもやるといふのが日蓮主義の考てある。

### （五）現實的活動と日蓮主義

日蓮主義は痩我慢をするのではない、常に活々した心が充實して活動をする、自分の爲すべき事は如何にしても仕遂げる、現實に此の世の中で善良事に向つて成し遂げる之れが日蓮主義の活きた事實である。あの婆さんのやうに此の世の念佛は未來の爲だから、未來の百年よりもよいと只未來ばかりに執着して此の世を見ては此の世は活きて來ないと思ふ。

### （六）釋迦の蛇の譚と露西亞

只今露西亞は實に面目ない狀態であります。所が釋迦はチャンと之れを豫言してをらるゝ、釋迦佛は蛇の談をしておいてになる之が露西亞の現狀をピシャッと物語つて居る、一疋の蛇があつた、首と尾とが爭を始めた、尾の曰く、貴樣はいつも先に立つて我を引つ張廻す、旨いものは貴樣が食ふ、怪しからぬ奴ぢや首の曰く、我輩は昔から偉いのぢや、ナニ儂が力ぢや、イヤ儂が偉いのぢやと爭つた結果、然らば何ちが上か實驗しやうと云つて、尾は木に卷き附く、是に於て首は前に進むことも出來ず、其處で双方は方針を探りかへてみて、尾が先に立つ、所が尾は眼もなく鹹に不自由で遂には穴の中に墜ちこちて死んで了ふたといふのである。これは釋尊の蛇の譚であるが、人間も亦自分の分限を守ることを忘れてはならぬ大義名分を紊してはならぬ、今の露西亞の現狀は實に此の蛇のやうではあるまいか、兵隊は曰く我々がなくては戰も出來ず國も守れまい、勞働者は曰く我々が働いて我々が食ふのだ、上の人は曰く己が爲らいのだ、何とか彼とか爭つて居る結果ヒックリ反つて、さて今は逆に歩いて居るのである。日蓮主義は自分の分に應じて努力し勉勵して行くのである、首は首の役に力める、尾は尾の役目につとめる、其へんが日蓮主義であることを知らねばならぬ。



### （七）大義名分を明に

日蓮上人は大義名分の劣へた時に成長された。武士が上下の理に迷つて居ると きに立つて其迷ひを叱咤されたのである宗教でも道理を誤つて本佛を忘れる、恰ど我家の父を忘れて隣の父を尊んで居るやうなものである。這ふ云ふやうなときは大義名分を明にすべく立つたのである只今も亦其時に似て居る、露西亞のやうなのは其れてはあるまいか。

### （八）我が日蓮主義

今の戰爭が終つたならば我邦は種々の上から壓迫を感ずるであらう。今は成金などがあつて浮れて居るやうだが、此の反動はあるものと思はねばならぬ。今から後の人々は確と心を定めて、何一つも國の爲になるやうに心がけて其如何なる時代にも腰のくだけるやうの事があつてはならぬ。殊に宗教信仰は精神の基礎を成すものであるから迷信にかゝつて己を誤り國を誤つてはならぬ。二十五億圓の金が地下に埋めてあると騒いだり、又多くの人の迷惑をもかゝはず米相場が上るやうに下るやうにと勝手な願を神佛に懸る、これ等は皆迷信であつて併せて國家を毒することになる。

美しい娘を生んで左り團扇で生活るやうにと祈るのは否ないが、立派な子供を生んで國家の爲に又は我家を立派に立るやうにと望のは條理がある。醫師を無視して病氣の平癒を祈るのは迷信である、慈愛又は孝養心の上から其平癒を祈るのは正しい心の基礎となつて居る。總て物は考へ方觀方に依つて大へん違ふ、心の據へ方一つで東西に分れる、私の書いたものを雪と墨に考へ違ふ婆さんのやうに間違つては困る。要するに、我日蓮主義者は分を守り、自分の盡すべきに極力盡し、苦しみに失望し逆境に落膽せず、出精努力し、他人の難義を見ては同情し親は親、子は子、君臣大義名分に從つて進退せねばならぬ。我國のやうな美しい大切な御國に生れて來ては正義心を離れず正信常に安住して爲法爲國に身を捧げ一朝事あるときには身を死して公明正大に殉せねばならぬと思ひます。（完）

# 本尊に對する意義

石橋會章

近時諸種の本尊論起り爲に初心の者は大に其歸趣に迷ひつゝある有樣である。夫れは宗祖以後中代の弊害を矯正するの意義に出づる者は大に佳として迎ふべきであるが、自己獨得の意見を以て宗祖の法を改轉せんとするものは大に排しなければならん。近時新論者の言としては本尊の書式を一定して宗祖御自身の書かれたるものに於ても或は取捨を論じ、或は壽量顯本の上は二佛並座は法界唯一佛の理に戻るとして強て一尊四士の本尊を主張し、或は一遍首題を以て最上最尊の本尊なりといふ、或は其他にも種々ある樣なれども是等が最も勢力ある說である。

然るに予の考ふる所に因れば、是等は何れも本尊に對する眞の意義を了解せない爲に斯く迷論する者であると思ふ。兎に角宗祖聖人御定になり御自身製作になつたものに對して後人が曼りに變改を加ふべきものでないと思ふ。而して又本尊は書式でなければ不可んとか、或は木像體が眞の本尊であると云ふのも是又迷へるの議論であると思ふ、是等は強て云ふ時は偶像崇拜又は紙墨崇拜として眞の生けける實在の御佛に接する事を知らないものである。文字も木像も本佛を代表する意味に於ては同一である。要は此本尊を通して此土に住し玉へる本佛を意識すべきである。譬へば我等天皇陛下の御眞影に向て禮拜する時直に宮城中の天皇を聯想し奉ると同樣である。釋尊は常に此土に住して我等を救濟し玉ふと雖、我等は惡業の因緣を以て雖近而不見である、因て御佛を慕するの餘り此に其尊影を製作し、或は御名前を書き顯し、是が御佛なりと思ふて禮拜し所願を言上する時、其誠心は感て實在の本佛に感應して救濟の運びに至る事が出來るのである。是が眞の壽量信仰の者であると思ふ。漫りに紙墨に拘泥し、或は木像に拘泥するのは未だ眞の法華經信仰の者として其意義をなさないと思ふ。而して一本尊に於て、法界自爾の本尊、靈山顯現の本尊、行者已心の本尊の三通りの意義がある、是等は一本尊に向て信仰を抱きさへすれば自己は知らずと雖自然に此三義を成就する事が出來るのである、扨て法界自爾の本尊及行者已心の本尊の二義は且く措き、靈山顯現の本尊に就て一言せば我等が本尊に向ひ奉つて合掌禮拜するは　即我等此に靈山の聽衆として末座に居し直に釋尊金口の說法を聽聞するものと解すべきである。乃ち本尊に向ひ誦經するは自身より本尊に向て說法し聽かするの意に非ずして、上に勸請し奉れる釋尊の金口より發する御聲なりと解すべきである。何んとなれば經には此經を信ずるものは直に佛口より此經を聽くが如しと云ひ、宗祖聖人は法華經を信ずるものゝ前には滅後と雖佛在也なりと云ふてある、然らば我等は敢へて經を讀誦して釋尊に言上するに非ずして、法華經の說法を本尊の御前即靈山會上に於て聽聞し居るものである聲は我が口より出づるも其は我が迷妄の聲に非ずして大悟大慈の本佛の御聲なりと得意べきである。而して我は一心合掌して拜聽し居ると云ふ觀念を以て讀誦すべきである、若し之を直に了解し得なば本尊の書式が何等の紙木が何等のと云ふ論は起り得べき筈がない。又一遍首題を本尊とするの誤りも別るてあらう。彼等は本尊と云へば強ち紙又は木を指すものであると思ふからである。彼の靈山顯現の儀式は紙に書くべからず、木像に現すべからず、是を以て之を見る時は佐渡始顯の本尊と云へども實に略中の略である又一尊四士論者は自己の臆測を逞ふして壽量顯本の眞義を知らず、兎に角法華經を讀んものは釋尊の法華經を說き玉へる時の儀式を顯し奉るべきである。小乘經を讀まんものは小乘經を說き玉へる儀式を造るべく、華嚴　方等、般若皆同一である。如何となれば前に云ふ如く其經の說法を爲し玉ひつゝあると云ふの意義を以て奉請するからである。若し釋尊一尊四士の式を以て壽量顯本を示し玉へば、末代一尊四士を本尊とするに何の異議があらうか、而るに壽量の顯本は正しく二佛並座の式を以て行はれたるを如何せん又未來永劫壽量の顯本は正しく二佛並座の式を以て行はれるてあらう。又一遍首題主張論者は實の尊きを知て之を授與せられし本師を忘るゝ者不知恩の者といふべきである。經に則便服之と云ふも心大憂惱乃至若父在者と云ふも、則自の孤獨を悲み父を戀慕するの餘り心遂醒悟して良藥を服するのである。終りに一言せん本門壽量の三寶とは良醫と良藥と遺使還告であることを。





# 機微譚語

山根青村

## 三四　得法眼淨

尊者迦留陀夷一日行乞して婆羅門の家に到る、主人在らず婦一人門を閉ぢて餅を作る、尊者神通力して門内に入り餅の布施を乞ふ、婦甚だ慳吝にして與ふる心なし、曰く尊者若し兩眼を擲出せば餅を布施せんと、尊者の兩眼拔けて盆に滿つ婦曰く尊者若し倒に立たばと、尊者即ち鵝鉾立となる、婦曰く尊者たとひ死すとも與へじと、尊者忽ち死して全身冷却、婦尊者の手足を撫て大に驚いて曰く、此尊者は波斯匿王崇敬渴仰の人、如何なる罪科に行はれんも計り難し、惜けれども餅一つ進ぜんと、尊者復活威容を正す、婦約束なれば澁々ながら餅一つ施さんとす、何ぞ圖らん數十個の餅密着して一片となる、尊者敎示して曰く、予餅を欲するにあらず汝の卑吝を矯めん爲に來れるなり、汝約束の一個の餅携へて我と同行せよと、則ち祇園精舍に到りて其餅を諸比丘に供養せしめ、更に大に如來の大法を複演し、婦心醒めて法眼淨を得たり。

（十誦律）

人は欲の動物なり、されど其欲はほど〳〵にすべきなり、法に過れば强慾となり貪慾と謠はる、全然欲を離れよとにはあらず、欲を離るゝ丌は灰身滅智なり厭世的消極主義なり、ほどよき程度を心得よとなり。聖祖の「欲をも離れずして佛になる事の候ぞ」と敎示されし妙旨味ふべきなり。

門に立ち物乞ふ人の聲きかば哀れとも

おもへ施さずとも

とは、顯本法華の開祖玄妙日什上人の聖歌なり、歌意拳々服應すべし、池上右衞門宗仲宗を改めて法華の大信者となる、父左衞門聞て喜ばず大反對の結果、宗仲を廢嫡して二男兵衞宗長に家督を讓り代へんとす、兵衞亦聖日蓮の敎示に信從するもの、されど人は欲の動物なり、萬一兵衞にして此場合動物性を發揮し、不倫の弟となり併せて退大取小の徒とならんか、聖門下の權威に關するもの大也、是於乎聖祖身延より深刻の敎訓書を遞送す一句一語血と涙とに彩られたる錦繡の大文字なり、兵衞感泣師命に聽從して速れ此經難持の金文を色讀し、兄弟兩夫妻心を協せて益々强盛の菩提心を奮起し、熱涙滂沱父を諫諷す、父左衞門漸くにして曉る所あり懺悔宗を改めたり。如今日蓮宗大本山として荏原原頭蔚然たる池上本門寺の大伽藍は斯る事歷の結晶たるを知らざるべからず。

聖語　和殿兄を捨て兄の跡を讓られたりとも、千萬年の榮は難かるべし。

（兵衞志殿御返事）

## 三五　光圀の孝心

水戸黃門光圀は古今の名將なり、彰考館を起して大日本史を編纂し、全國に周遊して兵庫湊川に忠臣楠氏の墓を建つる抔、强きを挫き弱きを扶け忠臣孝子節婦義僕を見遁さぬ美擧善行數多かる中に、

特に最も稱揚すべきは天性至孝、自己の誕生日に必ず精進潔齋もて母の重恩を奉謝せる一事是なり。其言葉に曰く、『世の人々は今日の自身の誕生日なりとて、酒を呑み歌舞音曲をさへ混へて躍り喜ぶが自分は其日出度日に逢ふ毎に、深き恩ある母が懷胎十ケ月の其間胎内にて育てられ、出産の其の刹那には生死の苦みをせられて、我を此世に人となし給ふ其深き御恩と其苦みを忍べば、何として歌い醉い笑いさゝめけやうや、思へば此日こそ予の生涯の最も愼まざるべからざる日なり』と。言肺腑より出てゝ一字の改竄を許すべくもあらず。（西山公事蹟）

げに孝は百行の本、忠臣を求むるには必ず孝子の門に於てすとかや、深草元政喩じて曰く、「吾れ亦之を佛に聞く、孝順を至道となす」と。然り孝順は天下の至道なり、佛陀切々の教訓大藏全典に渉りて說かざる所なく、佛子苟くも孝道に背反せんか成佛思ひもよらず、人非人なり畜生なり、其面に唾すべく其頭に鐵鎚亂下すべきなり。聖日蓮は特に此意味に於て摩訶梵音聲を張上げ、警策叱咤時代の不孝兒と戰ひしなり、『此經は內典の孝經なり』と斷じ、『孝養に三種あり』と敎諭せし抔、遺文全篇殆んど孝の一字を以て掩へりと謂つべし。節七月盂蘭盆會勸修の季に允りて左の聖語を捧讀し、僧も俗も猛然として自省すべき也。

聖語　又在家の人々も我父母地獄餓鬼畜生に墮ちて苦患を受くるをば弔はずして、我は衣服飲食に飽き牛馬眷屬充滿して我心に任せて樂む人をば如何に父母羨ましく恨み終らん。僧の中にも父母師匠の命日を吊ふ人は稀なり、定めて天の日月地の地神怒り憤り給ふて、不孝の者と思はせ給ふらん。形は人にして畜生の如し、人頭鹿と申すべき也。（四條金吾女房御書）

## ●新文學士二名……品川本光寺

今成日誓師の高弟佐藤重賢、淺草慶印寺山根日東師の高足武田顯龍の兩君は、何れも去月東京帝國大學文科大學を卒業して文學士の榮冠をかち得たり佐藤君は純正哲學科にて其卒業論文は「我、自我、及び諸我」、武田君は宗教科にて「平家、鎌倉時代の佛教思潮と其影響」なりと、因みに本年の御門下卒業生は右兩君のみにて他教團には無かりしとぞ記者は兩君の健全にして自重、日蓮主義の前途に多大の寄與あらんことを祈りて止まず。



### 詩

大阪　久保　郁藏

大正丁巳第六月某日余依山田翁齋雅兄之媒初繙統一誌大有所感因是賦七言絕句二首以贈于竢城松尾雅君併乞之政

二首　其一

聞說操觚松尾君
圖宜世上法華文
因緣敎僕臻繙誌
統一墨光期放勳

二首　其二

法華宣布責非輕
顯正破邪救衆生
異敎如今滿天下
期君筆克譴蛟鯨



祖師御傳

# 日蓮聖人

## （七）各宗渉獵（つゞき）

▲正誤　前號に寛治四年（一七頁中段）とあるは寛元四年の誤植。

### 三井寺遊學

蓮長師は思ひ立ちてそれより江州の三井寺に趣かれました。

▲參考●三井寺は比叡山に先立こと一百餘年、天智天皇第五の皇子、大友の殿宇を寺に變じ園城寺と名づけたるなり本尊は彌勒菩薩なり、中興は智證大師（讃州の人）十四歲の時に叡山に登り、義眞和尙の法子となり、後慈覺大師に與同し、口に天台を唱へ、心に眞言密部を存じ、しかも大德にして三代の帝王の御戒師となりし人なり。

此寺も慈覺と同論、法華經の正蹟は絕ちて天台傳敎のおもかげもない、師は之れを思ひて今日本一宗正法に背いて釋尊の本懷はあはれ滅却せるかと悲嘆されるのであります。

▲此の三井在學の節、鎌倉より歸山したる善鸞といへる沙門より種々鎌倉の消息を聽かれしことありその要左の如し▲寛元元年極月廿九日白き虹唯一筋日輪を貫いて一天に跨る▲同二年長の三月將軍賴經鎌倉中の神社佛閣に殘りなく順拜△四月廿一日嫡子賴嗣元服將軍に任ぜらる齡六歲、△七月五日前將軍賴經廿六歲久遠壽量院に入て入道し行知と稱す、△同四年三月彗星、▲寶治元年未三月十二日夜戌時に大流星飛ぶ、△同十七日黃色の蝶無數に鎌倉の市上に飛散す（承平年間常陸下野にも此事ありしといふ）△同廿一日由井が濱の沖俄に紅ひに變じて大海朱の如し△是より先十一日奧州津輕の海にも亦紅色して人魚の如きもの多數死す。（建保元年四月にも此事ありと）

（南都唐招提寺より興福寺を望む）

その頃天下に不思議の怪しきことが多いので、蓮長師は、此世滅するにもあらず、政治の亂れたるにもあらず、しかも斯く怪しきことの多きは佛法に惡僻多きに據るなるべしと歎息あそばしたと申します。

寶治元年も半を過ぎ秋の初め三井寺の學寮に別を告、大津より京都に出天王寺屋淨本がもとにお立よりになりました。

▲寶治元年は蓮長師二十六歲なり、鎌倉三浦泰村は秋田義景と惡しゝ、泰村心誇りて將軍の下知を蔑る、依つて時賴漸く難心す、義景機に乘じて手勢三百餘騎を率して不意に泰村を討つ、時賴も意を決して同族時定をして五百餘騎を率ひて泰時を討しむ、加勢走せ參じて雲霞の如し、泰村防戰つきて舍弟光村と共に法華堂の賴朝の影前に一族郎黨五百餘名と共に自殺す。是れ實に寶治元年六月五日の事なり。泰村が妹聟上總秀胤下總一宮に籠り大須賀氏を討手として軍を發す。

蓮長師は心の底に佛法亂れて王法亂れ國內の騷擾も皆佛法邪正の混亂に依りてなりと悲み給ふのであります。

### 南部六宗

師は一夜を淨本の宅に宿り、それより南都に趣き元興寺に入り、興福寺に入り南都の諸宗をお學びになります。

▲参考　南都は元明天皇和銅三年に遷都し光孝天皇に至る七代の都あり、元興寺は三論宗にして高麗の慧灌和尚の傳来にて唯心無境を立つ。倶舎宗は天平七年、玄昇法師の弘め初めしものなり興福寺は法相宗にして道昭律師唐に於て玄昇三藏より傳はるところ。東大寺は華厳宗にして孝謙天皇勝寶六年に良辨大僧正勅を受て入唐、盧山の恵遠法師より習ひ傳へし華厳經にて、三界唯一心と立、十玄六相の法門を備へたり。成實宗は體空無生の法理とし獅子鎧三藏が造りたる成實論を根とする宗門なり、招提寺は戒行律宗の本寺、天平勝寶六年聖武帝唐の鑑眞和尚を我朝に請待したるなり、之を南都の六宗といふ、蓮長師は皆之れ等に入りて各教意を學ばれたるなり。

呈天位

## 課題和歌發表

### 『夏池』

子爵　清岡長言選

美しく咲きにほひたるはす池のまき葉の下に魚もすみける　新潟縣　藤田鶯園

日てりして雨そふ里に水きよき池こそ民の命なりけれ　東京　篠田眞二

池水に影をうつしてとふ螢草ばの陰に日くれ待ちけん　青森　中村龜江

ふる池の水もひかりて涼しさのうつりて見ゆる夏のよの月　京都　竹本蓬一

はちす葉の露にも月のやどりつゝ見るも涼しき池のおも哉　千葉縣　並木博

ほたるとふかけも涼しき池水に舟を浮べて遊ぶ嬉しさ　千葉縣　並木うめ

夜もすがら池をめぐりて夏の夜のかたむく月を眺めけるかな　大阪　長尾猶之助

四方の田は割るゝはかりの夏かれに底さへ知れぬ村の大池　名古屋　有田麗陽

水きよき池のみきはにたゝつめはすゝしき風に暑を忘るゝ　有田信子

いと清き蓮の花にひかされて朝とくめくる古寺の池　有田日篤

吹く風に露もこぼれて朝まだきみるも涼しき池の面かな　丹後　廣岡圓

朝風に蓮の花もひらきつゝかをり涼しき忍はすの池　東京　熊澤優

夕涼み池の邊りに休らへば庭石つたひ蛙飛び來る　東京　立川長重

蓮の葉の露さへちりて朝まだきこゝろ涼しき池の朝風　千葉縣　福島正之

池の面に舟をうかべてすゞむよは月もうつりて涼しかりけり　同　堀江得一郎

岩間よりあき出る池のすむやとは夏をわするゝ音の涼しさ　越前　森川茂

青きぬにつゝむかゝみとみゆはかりわか葉色そふ庭の池水　東京　勝田宣和

### ○佳作

夕風のそよくまに〳〵螢とふ池の汀そ涼しかりける　千葉縣　渡邊乾航

ひとしきりふる夕立の雨はれてなこり涼しき池の面かな　備前　原田日男

三日月の影さす夏の池水にひるのあつさも忘れはてけり　伯耆　篠田純榮



夏の夜の池にうつれる月影はすゝしきものゝ限りなりけり　越前　秋葉純一

夏の日のあつさ忘れて糸垂るゝ池のほとりの風はすゝしき　長野縣　太田篤夫

たゞ殿にたゝすみおれは池水に月もうかひてすゝしかりけり　京都　中野正甫

見るまゝに身こそ涼しく成にけれ青葉のかけの夏の池水　千葉縣　笠見樂也

端居して夕餉にぎほふ家人にすゞかぜおくる庭の蓮池　東京　篠崎芳子

賤の女はたらひを舟にあやつりてぬはな採るなりさとの溜池　大阪　南美鶴子

○人　東京　山根青村

朝風に露打ゆらく花はちすにほひすゝしき不忍の池

○地　東京　小柳英夫

あけやすき月夜をしはし我世とて菱のはなさくふる寺の池

○天　下總　星野聖祐

水無月のあつさもしらて池水に舟をうかへて子等のあそへる

## ○和歌課題

▲八月號（七月末日）題『法師』
▲九月號（八月末日）題『古城月』
（寄稿規定表紙の二面を見よ）

## ○二段のうめぐさ

（鼓城生）

○二段、あきが出來た何かスク書けとの事に印刷の音を聞きながら筆を採る。

○和歌の課題に對して、題意を考へ誤る人が相當ある由にて、それ等を捨てれば淋しくみゆるものから一人一題にして成るべく掲載の事にして貰ひましたが、月を重ぬると共に選は嚴にしたいとの選者の自分に對しての御談でありました。一層たゆみなく御吟詠のほど御希望致します。

○上手な人は三句ながら良いものさへありますが紙面の都合で一人一首と當分は御承知下さい。

○近く知つて居るものでは金港堂の加藤駒三郎君が逝かれた、同氏は自分の勸めに依り佛教信を抱いて本年一月頃には大學の樹洽會に本多猊下の法華經講義の會座に列せられて以來非常に滿足の意を書面を以て申越されて居られたが遂に病を以て逝かれたのは遺憾に堪へぬ。

○本月六日大阪府選出代議士本出保太郎君が病逝した。自分は俗界に於ては政治上政談に於て同氏を大に助けたこともある。嘗て同氏は應援に我が山内櫻溪詞兄を招聘したこともあつた、之は自分が紹介したのであつた。同氏が政治上の意見進退は兎に角、個人としては全く立志傳中の人物である、水呑百姓の小忰の青菜賣から巨萬の財と代議士と勳三等とを贏ち得たのは敬服する又風流上では南畫を同じく米華に學んだところから自分等とは時々下手な合作などやつたこともあるが、彼も遂ひに死んだ。

○同氏は眞宗であつたが嘗て眞宗の腐敗を嘆じて同宗を嫌厭して居たが、葬儀は天台宗に依つたらしい、一層本化に進めしむることが出來なかつたのは友人たる自分の不德である。

○備前の日蓮聖人大石像の發起人であり本多師の法華經講義には、題に壽量品の一句を書寫されたる等多少本化式を帶びた子爵花房義質君は九日に逝かれた同子は岡山縣人である。

## ●千葉縣聖祖門下記念講演並に殉難警官法要

千葉縣下聖祖門下八百ケ寺院檀信徒の同盟に成れる記念講演は六月廿四日千葉縣公會堂に開催さる、出席演者は。

開會の辭　司會者　中村日錦
三大誓願　マスターオブアーツ　柴田一能
國家と宗教　法學博士　山田三郎
無數手の菩薩　權大僧正　野口日主

各氏熱心に演了、聽衆四百餘名にて盛會なりし。餘興の桃川蝶花の『乃木將軍と花屋の婆さん』なる講談は人氣盛んなりき。同日午前中行はれし警官殉難法要は本年は日蓮宗の當番にて、喜多村管長親修、多數の警官參拜堵列したりといふ。

## ●統一閣下半期出席辯士

淺草區統一閣に於ける日曜講演は本多主任講師の缺ぐなき出席と他辯士の熱心講演とに依り、昨年頃より漸く多數を加へ、殊に本年に入りては毎回入場者少きも三百多きは五百に及ぶの盛況を呈し、加ふるに一般聽衆の多くは信仰把持の傾向を表白し大に有望の域に進みたるを以て主任講師は此際毎回聽衆の入場し仕切れざるほどの盛況を期待し、各部員を督して廣告等に遺漏なきを期しつゝあれば其理想に違することなからざるべし、而して本月以後下半の出席辯士は左表の如く、外に本多主任の出講は毎回缺ぐことなく、又居士名士一人づゝ毎回出席ありといふ。

| | | |
|---|---|---|
| 七月 | 一日 | 梶木村 |
| | 八日 | 野口 |
| | 廿日 | 今城石川 |
| | 廿五日 | 山根高木 |
| | 廿二日 | 鈴木小西 |
| | 廿九日 | 笹井熊井 |
| | 五日 | 笹川大森 |
| 八月 | 十二日 | 關田松尾 |
| | 十九日 | 井村梶木 |
| | 廿六日 | 石塚木村 |
| 九月 | 二日 | 野口 |
| | 九日 | 石川 |
| | 十六日 | 今城小西 |
| | 廿三日 | 山根熊井 |
| | 廿日 | 鈴木大森 |
| | 廿七日 | 笹川松尾 |
| 十月 | 十日 | 梶木 |
| | 十四日 | 高木 |
| | 廿一日 | 石塚石川 |
| | 廿八日 | 野口小西 |
| 十一月 | 四日 | 今城熊井 |
| | 十一日 | 山根大森 |
| | 十八日 | 鈴木松尾 |
| | 廿五日 | 笹川梶木 |
| 十二月 | 二日 | 關田高木 |
| | 九日 | 井村木村 |
| | 十六日 | 石塚石川 |
| | 廿三日 | 小西 |

## ●統一閣日曜講演

▼六月三日午後一時半公開
（別に日蓮上人傳は時間前三十分間）
日蓮上人の女性に對する慈愛と感化　高木本順
獅子王の子　山根日東
法華經要義（其四信解品）　本多日生
十日午後一時半より
（別に日蓮上人傳は時間前三十分間）
清如蓮明似日　松尾鼓城
宗教の綱格　笹川日堂
未定　小關三平
法華經要義（其五藥草喩品）　本多日生
▼六月十七日講題講師　石川顯隆師
本佛の慈悲と其の教訓　關田日城師
信仰の鍛錬　小笠原丁君
慈愛　本多日生師
法華經要義（授記品化城品講述）
▼六月二十四日講題講師
與同の二方面　熊井本光師
法華經の信仰及表現　小西日喜師
數字妙　岩野直英君
法華經要義（五百品人記品）　本多日生師
▼七月一日○開目抄の要領　木村義明
日蓮主義の宗教　梶本日種
我が日蓮主義　佐藤鐵太郎閣下
法華經要義（法師品）　本多日生師

## ●各山役員會（京都）

六月十一日午後八時小川頭本山本法寺に於て金光、野木、高橋の三幹事を始めとして數名出席、京都護國團起草員を選擧寂光寺貫首萩原啓門師、本法寺貫首伊藤日修師當選承諾せられたり。

## ●青森地明會

六月十六日は陰曆四月二十八日建宗記念日に相當しければ、幹事阿部秀三君宅に開く、阿部幹事初心成佛抄を拜讀して講演。

佛陀降生の因由　阿部秀三
建宗記念日に就て　西寿蔵
思潮の歸向と日蓮主義　中村謙
各熱辯を揮ひ、祖文拜讀に閉ぢ訖つて建宗記念の祝杯を擧ぐ、會衆三十、慶祝の主誠を披瀝し將來の發展を議し鄭々裡に隨喜退散（青森地明年報）

## ●奇特なる行爲

大阪市田中佐平治氏は極めて篤志家なか、去る大正三年岡山縣和氣不二と稱する山腹に、竪十間横三間ある大自然石あるを知り、原田日勇師に乞ふて大題目（一字大約二間）と其兩脇に一天四海皆歸妙法の八大字とを彫刻し、以て　明治天皇御遺嘱、及順逆兩緣の爲とし、其篤志は曾て當時遠近の人々の耳目を驚かしたりしが、玆に又去月十九日例年其祭典の基本金を和氣本成寺へ當て寄附されしかば、原田日勇師は直に信徒總代連名にて永代堅全に保管することゝし、以て施主の篤志に酬ふることゝし速時萬端其の手續を了したりとは奇特なるべしと云ふべし。

○和氣石川郡長の詩日

題目巖

報謝誰題七字銘　南無妙法德惟馨
大書深刻驚人目　起敬千秋巖有靈

## ●本福寺修善成功式

千葉縣山武郡福俵本福寺は井村日成師寺住職名義にて堂亮雄師擔當者として常在のところ本堂庫裡大破に及び、其庫裡は既に修繕了りたるも本堂は頗る大破なるを以て檀家有志家に計り總代人北田直太郎、田邊竹造、林榮助の三氏、其他諸氏の贊成を得、夫々寄附金の應募を得、本年二月起工、六月末にて終業したるを以て四日盛んなる竣工式を擧行す、午後二時には導師は井村師、山岡、成島、金阪、草切、田邊、久松諸師其他僧員數名列席の上、開基日行上人三百五十遠忌並に且信徒の追悼を兼ねて音樂法要修行し、引續いて講演あり。

開會の辭堂亮雄、開堂式に就て井村日成、日蓮主義に就て土屋賢生の三師出席し、それより東京桃川蝶花の餘興講演あり、夜は我誌主任松尾鼓城氏出演一場の講演あり、終りて桃川の餘興ありて十一時頃散會したり、當日は同寺檀家は勿論近郷近在より多數の參詣聽衆あり、近來稀に見る盛儀なりき。尚堂宇の莊嚴實は北田、田邊、林、秋葉音治の四氏特志寄附なりたるが該總計費は六百八十圓餘にして、堂師及び總代其他の熱心が能く之れを成就せしめたることを見られたり。

## ●東金町の講演

本年四月頃松尾鼓城本誌主任の來東を機として片岡盛助氏は一席の講演を請び有志聽衆三十名と共に質問等を發して教益を受くるところあり、又本月五日には特に同氏の出席を請ひ知人有志を招いて一席の講演を開き法益に盡すところありきといふ。片岡氏一家は打揃ふての强信者しにて同縣に於ける熱心護法の急先鋒として人に知らるゝ人なるが小川巖司、小川和光氏等と協力大に斯道の發展に盡されつゝありと。

## ●支學林生の意氣

千葉縣大網町顯本支學林春季布教の報告は先回時機を逸し我誌に報告し能はざりしも、別に其生徒の意氣外聽くに青春熱氣漂りて將來の教命を奉ずる覺悟殊勝なる由にて、船橋常敬、東貞、安藤乾國、中島元道、小林智道、松井義雄、大川孝準、出口眞道、小川眞精、中村信孝、津村俊乘、大島勇、小宮智應、吉見俊教、藤啓純、星野純義、豐田通泰の諸氏外に秋山、國分、森川、土屋の諸師指導して或は道路或は信徒の家宅に講演又は法要を行ひ、四月十九日羅市の節は土氣の黑木醫師より金貳圓を寄捨し、四月廿八日は東金　片岡氏、五月一日東金町小川氏の宅を法蹇に供せらるゝなどの反響あり、又大網婦人會の援助及講演開始など近來の千葉縣は學生諸子の急先鋒ありて布教大に有望となれりといふ。

## ●思恩教林

淺草區永住町妙經寺に於ける思恩教林七月講演は左記の如くにして外に餘興數種ありしといふ。

人心と道心　熊井統合大學講師
所住處常寂光土　野口權大僧正

## ●千葉縣

●顯本青年布教　五月四日、本月第一回茂原道路布教開演す、午前十時玄題旗を先頭に渡邊管事、竹内、山田、河野、宇津木、吉井の諸氏各所に開教各自雄辯を揮ふ十二時四十分閉會せり　八日押日來光寺に於て本團例會を開く、出席者は渡邊管事、竹内、山田、河野、山本、長岡の諸氏なり午後より祖書素讀會を開き第一に安國論より輪讀することに決し尙研究問題を討議して午後四時無事散會す●廿九日茂原道路布教開催す出演者は山田、河野、竹内の三名午後一時開會す。

●六月四日茂原道路布教開演す、出席辯士　竹内、山田、河野の三氏午後一時半閉會す●八日上野妙典寺に於て今月の例會を開く出席者は山本、河野、稻子、山田、竹内、長岡、古口の諸氏なり午後より祖書素讀をなす開目抄上卷讀了尙其の他研究事項討議す右終て種々協議をなし午後四時半閉會す●十四日茂原道路布教開演す、出演者は山田、竹内、山本、稻子の四氏各自其の雄辯を揮ふて主義を宣傳す午後一時半閉會す。

## ●名古屋教報

●六月二日、（土曜講演妙行寺）師弟の情誼大口全三郎明治と大正有田安道、語心の力國友日斌、○同八日（常德寺）皆歸妙法大口全三郎、日蓮上人の理想鈴木默庵日蓮上人の勤王有田安道、人生の氣意義國友文學士、○同十日、（ニコ〳〵健兒會靈山寺）健兒三百、三歳の辛苦栗原八重子女史、飛行機吉川窓外、六人兄弟有田麗陽、誠の德教育家大口吐虹、○十六日、（土曜講演妙行寺）極樂菊地乾淨、中京の精神界有田安道、蒼振摩經綱要國友日斌、○十七日、（小國民修養會常德寺）聽衆二百、功績吉川を窓外、慈勇有田麗陽、長吉と葉名古屋新聞記者大口巨口、片岡源五右給門教育家大口吐虹、○廿二日、（國勢會靈山寺）武士道に就て森其平日蓮主義の眞髓大口全三郎、法華魂有田安道。

## ●京都布教報（六月）

一日　木山國禱會
　阿闍經說相　三好信道
同　明德學得　萩原啓門
　時機相應
二日夜　護正會例會　萩原部長
　觀心本尊抄續講
三日　成就院婦人會　清水一乘
　如說修行抄
同日　大慈院婦人會　銀井乾卉
　是眞佛子
三日夜　同志會例會了光院

大正時代の布教法ニ就テ　萩原啓門
五日　西陣渡邊氏家庭講演　清水一乘
佛教道德　清水一乘
七日　西村吉右衛門氏家庭講演
功名と生命　萩原部長
八日　萬養軒講演
料理と生命の關係　萩原啓門
九日　正行院婦人會
母の十恩　萩原部長
十日　下京區鐘紡會社講演
壽命長久の術　萩原部長
同夜　堺町本田氏講演
佛教とは何ぞ　清水一乘
同日　本正寺婦人會
信仰の活路　金光孝碩
十二日　明德學園
開會之辭　久世寛照
相承論　三好信道
十三日　本山婦人會
佛陀と吾人の關係　銀井乾升
同日　間之町畑田氏講演
日蓮上人の人生觀　清水一乘
十五日　二條釜座山口氏講演
法華經主義　清水一乘
同日　出町古谷氏家庭講演
深心の水願　金光孝碩
同日　開會　川端署長　小寺尋氏
卒勵會寂光寺　免囚保護の會
教誡　監獄教誡師　八久世寛照氏
同　萩原啓門
同
十六日　法光院婦人會
講讀大藏經要義　金光孝碩
十七日　田中村鐘紡社講演
憲孚　萩原啓門
十八日　本山例會　銀井乾升
以信得入　清水一乘
日蓮上人の主張　萩原部長
行法觀　
同日　寂光寺婦人會
三衣の功德　萩原部長
廿二日　明德學園
開會之辭　久世寛照
信は人生の寶　三好信道
廿八日　本山婦人會
日蓮上人男女觀　清水一乘

## ●大阪教信

大阪生玉寺町堂開寺六月十六日夜開演、生死に出入して怖なし京藤義應、日蓮主義と教育上田布教師▼六月二十四日夜開演、實生活に及ぼす信仰の力京藤義應、國民教育に及ぼす宗教の力川崎布教師、何れも頗る盛會を極め聽衆は偉大なる力と滿足を與へられ法悦の裡に散開せり▼六月二十二日夜三軒家西崎宅にて聖典講究會開催、田中、橋本、笹川、京藤の各師出演、大法廣宣の爲めに盡力しつゝありと云ふ。

## ●福井市教報

●五月十三日市内田原本承寺に於て講演日蓮聖人の信仰●(五月十八日)市内紺屋町妙勳寺に講演法華經の眞意義●(六月十六日)市内相生町善慶寺に於て講演宗教の弘通の來歴を說く●(六月十八日)市内寺町本經寺に講演信心の要義を解く各々百名餘の聽講あり●七月より十八教區聯合布教會を開催し當寺に於て一ヶ月二回の公會を開く事に決したり。(石井寛俊報)

## ●福井縣南居教壇

●六月九日　縣内務部長三矢富松氏の紹介にて本縣下官吏教育家地方有力家二百有餘と縣會議事堂に會し『日蓮主義の要領』を講演す。
●六月十二日　午後七時より妙正寺に於て『世界の大勢を論じて日本帝國の地位に及び進で日蓮主義者の覺悟を促がす』聽衆百餘。
●六月十三日　午後八時より妙正寺に於て南居佛教研究會に修法の後『水の如き信仰』を說く。
目下農繁期なる爲め暫く休戰を宣告す(石井曉應報)

## ●明石教報

▲細野大佐講演　川崎布教師明石赴任早々組織したる橘香會は二週年記念として日蓮主義者として陸軍部内に其名高き篠山歩兵七十聯隊長細野長雄氏を聘し六月六日夜公會堂に講演會を開催せり。
國民教育に及ぼす宗教の力　川崎英照
國民思想の涵養に就て　細野大佐
▲諸處公會講演　三日、十三日、二十三日の夜に公會堂倶樂部に日蓮主義研究會例會あり、題は種々振舞抄纏講、辯士川崎英照、七月十五日夜は明石譯前松竹堂に於て、題は通俗法華經大意、辯士は同、●十日夜は木町、白井吳服店樓上に於て店員其他有志者の爲めに修養講話會を開始す、題は日蓮主義の修養及信仰、辯士は同、●十五日午前十時より第壹學校に於て明石町按摩業者の爲めに、題は心眼を開け、辯士は川崎布教師、五十名の盲人多大の感動を得たり。

## ●神戸教信

▲神戸護正會　は創立早々順調に發達しつゝあるが七月五日夜三宮道德義會に於て、題辯士は宗教の五綱、小笠原寂天、我國將來の宗教(其五)川崎英照●十七日夜同所に於て開催京都より金光布教師應援左の講演なり。
眞佛教　小笠原寂天
我國將來の宗教(其六)　川崎英照
教の教とは何ぞ　金光孝碩
十九日夜三宮カフエーオリエント樓上に於て神戸天晴會、神戸護正會聯合の許に蒲路より中川文學士明石より川崎布教師を聘し大講演會を開き五百餘の聽衆法雨に浴せり。





開會の辭　寺門甚太郎
國聖としての日蓮聖人　小笠原寂天
伊勢太廟と日蓮聖人　川崎布教師
日蓮主義の過去現在及び將來　中川文學士
餘興として旭團女吏の龍の口筑前琵琶ありたり。

## ●備前和氣

●六月二日山田村從野槻太郎宅にて講演、眞俗二諦原田日勇。一日夜は赤磐郡吉原金谷壽太宅にて神佛の食事原田日勇。三日は木庄村學校にて和氣郡教育總會あり。
日蓮國際と將來　野村岡山中學教頭
開谷中學の内容　今教顯
第二國民の將來　有森代議士
宗教心と戀愛心　原田日勇
●十一日岡山監獄訪問教誡(和氣郡)
有恥心　尾上全道
父母の慈愛　原田日勇
●十五日婦人會　お題目原田日勇。十六日同信會、菩薩行原田日勇

## ●山陰道伯耆

東伯郡倉吉町に於て從來立正會なる日蓮主義講演會あり、擔任講師として神會窪田純榮師の講演ありしが、會長の遷化ありてより種々なる寬障の爲め一時休會の止むなきに至りしも、今回熱烈なる求道の士によりて妙照會と名と改め月次講演會を開く事となり、六月八日第一回を催ふせり辯士は開會の辭官原教榮師、吾輩の希望門脇勝太郎氏、日蓮主義と實生活窪田純榮師にして終り　薩摩琵琶龍の口の彈奏ありて非常の盛會にてありしは大法の爲に悅ぶべし。

▲熊城君の『農民精神の頽廢と日蓮主義』は次號に掲ぐ

## 統一俳句課題發表

炎天。毛蟲。蓮花

### 新調

○印は佳選

○出船の煤煙夏の陽赤き阜頭　肥前　松尖子
○棕梠の影濃く小さく島人は皆跣足　同
○一丈の鱚釣揚げし甲板暑し　同
○毛蟲つかむ子逃ぐる子を追ふ夏野　同
△評　松尖子の四句何れも材料新らしく新調として推賞するに足る
炎天や玉川砂利の新市街　立川生
炎天に北極探險の話哉　名古屋麗陽
蓮の音聞いてから主人に對面す　同
○炎天や傘もゝずに銅像立つ　かね女
○木の下やつれり宙釣毛蟲の子　同
△評　此類の句は多かりしが宙釣の語おかし味多かりき
花月橋に假睡する蓮見乞食あり　同
○昨夜の雷雨をりげなく蓮花露帶べる　京宗樂
△評すつくりと一層蓮花の清けさが浮む。想、調、賞共に上乘の作なり、賞歎。
毛蟲怖る蛇捕男や笑止　同
荷積する外國船に夏眞晝　姫路南風
○炎天や毛髑瘦せたる撒水夫　芳子
炎天や井戸深うして釣瓶漏る　同
○雨後の陽に首もたげたる毛蟲哉　同
炎天や海に風出て波白し　青森惟泡
○炎天や甲板に牛の尿する　同
○炎天や瘦馬繫く化け柳　同
○地蟲尊毛蟲に首はこをぼゆし　同
○炎天や嚇と火を吐く鬼瓦　青村
○炎天や昨夜の寢不足眼に泌みる　京橋旭哉
炎天や双肌拔いて十五錢　熊城
蓮花七千萬の心哉　同
△評　これを大和魂とも云へやう。(但し先人は讒やうの句は句性上奬勵しがたしと云へり、多言多謝)
炎天や氷賣る聲は流れさう　成東懷光
炎天や隣でくさる賣り魚　同
○炎天や撒水車の跡蜻蛉地べたする　同
△評　全く實景の新らしき感興。
○評者の句
捨バケツ底に水あり毛蟲蠢　鼓城

### 正調

○印は佳選

○小毛蟲の葉を舟にして流れけり　鐵橋
ぞつとして毛蟲の青葉流す人　松尖子
○炎天や女工夫の顏の色　麗陽

斥候の襟二つ三つ毛蟲哉　同
○炎天に草の匂ひや河原路　名古屋鶴園
神木に毛を吹かれ居る毛蟲哉　京不二子
炎天をずん〳〵稻の延る哉　京宗樂
○ふくんたる傘や炎天に乾き過　同
△評　一寸した材を捕へたる所に却つて深味あり
炎天や泣く子を叱る女聲　同
○枯氣味の老樹にはびこる毛蟲哉　南風
△評　無殘を憶はする所一種の詩想をそゝる。
○鰐口や紐に毛蟲の這ひ昇る　慶山
△評　なるべく大きな鰐口（神社の）紐に。
炎天や埃中行蓆菜賣り　同
○日盛や庭の木蔭に麥粉挽く　金杉生
△評　いら〳〵と感ずなる炎天に却つて閑にして靜なる寂想を實證する手腕賞すべし。
○炎天や誰も下車せぬ村の驛　同
田舟半沈めりはちす花の咲く　同
若後家の隱居住居や蓮の咲く　同
△評　後家と蓮とを結びて何か諷刺するか又は賞歎するものと見ば眼氣な天保流となる。然れども單に蓮の家に若き美しき後家住むを見て、何ものか惜しき心の起るなどの着想と見ば佳なり。
外濠は蓮と化したり朝の雨　惟泡
大奥に毛蟲の忍ぶ嵐かな　白水
○煙るかと見れば蓮の細き雨　懷光
○卑垂る干竿の腹毛蟲這ふ　同
○此寺の奇しき物語咲く　同
○草庵や禁酒も五年蓮の花　同
△評　禁酒の初年に蓮を植えたるにや。

○蓮咲くや迦毘羅衛城の夏の朝　白藤
佛像の白毫光る蓮の花　同
炎天や龜の甲羅にかくる水　鐵橋
○評者の句
匂欄や羅衣の裾曳く蓮見る人　鼓城

## 常調

八尺の蓮花小さし　ロシヤナ佛　肥前
朝旅や薫から知る蓮の華　越前森仙
炎天に土用干す乙女の丸裸體　同
南無妙と唱へたくなる蓮華哉　立川生
炎天や簑下したる松の蔭　名古屋鶴園
炎天や木蔭に眠る幼牛　不二子
古池に咲くも脅き蓮哉　同
炎天や火を吐きそうな裸山　孤松子　伯耆
曲折もあらん尼僧や蓮の花　直水　大阪
遊泳や炎天に唇のくぢ色す　かね女
炎天は浮石に龜の眠哉　南風
五層樓堀一ぱいに蓮の花　同
尼寺の襖彩る蓮の花　同
振り落す毛蟲流るゝ濁り水　惟泡
箱庭の峠へのぼる毛蟲哉　慶山
岩を嚙む流れの上の毛蟲哉　同
炎天や行商書寢す掛茶店　金杉生
池に落る毛蟲に金魚集ひけり　チバ郡
丹精の蕾毛蟲に取られけり　白水
思ふまゝ風に吹れて毛蟲哉　旭哉
雨の中に彳む人や蓮の花　長崎天哉　肥前
炎天や轉寢醒めの心地惡し　天岳
雨の日の山家の椽や毛蟲這ふ　京都琴友
炎天や青田に雲の影戀し　同
城跡を廻りて蓮の名所哉　鐵橋
白蓮の香り床しき古城哉　蕉城
句を拈る佳人の窓や蓮香る　同
美しう夢も醒めけり蓮咲く　懷光
醒やらぬ枕から見る蓮哉　同
炎天や瓜冷こて子を下しけり　同
炎天や馬の背中に青葉哉　白藤
多立に毛蟲を數多落しけり　同
○評者の句
炎天や鹽原多助の眞つ黑な　鼓城

## ○句相模

炎天や荷を曳く牛のあはれなり　直慶
牛のそり炎天行くや辻小路　山
炎天をのそり〳〵と牛車哉　旭川哉
炎天や牛の涎の櫛くみち　白立
炎天に牛の涎のながゝと　熊水
炎天の長き哉　熊城
通ひ路を毛蟲にかへた海老茶哉　立川
毛蟲下るや廻り道する乳母車　芳子
やよ緋鯉露なねとして蓮の華　青村
蓮の花搖らす緋鯉の大いなり　旭哉
柴折りて見れば裏には毛蟲哉　天岳
搖るゝまゝの葉裏に重き毛蟲哉　旭哉
炎天の濱に裸體の小供哉　かね女
炎天や雜魚すくふ小供の臀からげ　白藤
炎天や梅干の香する眞晝頃　熊城
炎天に干梅の鼓數へけり　鐵橋
細箸の先になぶらるゝ毛蟲哉　惟泡
溫室や毛蟲を操む竹の箸
（此他略す）





## ●統一俳檀八月號課題（〆切七月末日）

### ダリヤ

（ダリヤは六月頃より十月頃まであれども、先づ新曆八九月に屬するか、初秋の季に屬するものと見ばよろしからんか）

### 河鹿

（蛙の一種なり、山川に住み美音を發して鳴く、又家に飼ふ、夏より秋に至りて鳴く、季は古來秋とせり）

### 朝顏

（索牛花なり）

## ●九月號課題（〆切八月末日）

投吟者諸君の御希望に依り以後二月越のものをも課題してをきます。

### コスモス

（秋櫻ともいふ、洋來の草花なれど近來何れの處にも生へり）

### 御難の餅

（文永八年九月十二日、日蓮上人相州龍の口に於ての御難を免れたるを後世祝して像前に備ふなり、彼の老婆のゴマの萩餅とは相違す）

### 名月

（舊八月三五の月をさす。此句古來作多くあり、なるだけ其れ等の似影を逐はざらんことを希望す、なるべく作例を參考せないことを希望す）

## はちす會

廿二日午後四時
統一閣に於て開

今回のは互選以外に取り立てゝ見るべきものもありませぬやう思ひましたて私の例評は御免を蒙りました。（鼓城）

▲次回は二十三日▼

○題　篠椅子
アイスクリーム

○地方の參加を（郵便で寄句を）歡迎す
○宛は統一閣。廿三日迄に着くやうに

### 夕立　互選

○一　點
○夕立や大阪の城拔けんとす　白藤
○蕨から夕立の潮曉めけり　旭哉
○張板に數點夕立の速さ哉　鐵橋
○夕立や友に別れて一二丁　咲香
○夕立や實田城の葉えけり　白藤
○一望十里むぎ畑を行く白雨哉　沿堤
○夕立や湯煙り黑き鍛冶工場　慶山
○夕立やまだ灯も入れぬ岸の船　懷光
○沛然と盥にあまる白雨哉　歩牛
○水車ゴト〳〵水當となり夕立す　旭哉
○雨戸の落ちて夕立のさわぎ哉　鐵橋
○夕立のやゝ靜まりて物の音　咲香
○神立のすきて山寺の鬼瓦　慶山
○二　點
○夕立晴れて樹肌に蓋く蟲白し　旭哉
○○驟雨やみて森を飛出る鳥哉　歩牛
○○夕立や沖の小舟は日の匂ひ　沿堤
○○夕立に蟻の一群れ流れけり　青村
○三　點
○○○夕立になすびの尻のよごれけり　歩牛

### 傘　互選

○日　點
○一　點
○長堤や寄りつ離れつ對日傘　咲香
○面恥し氣に右左日傘かな　鐵橋
○山坂を重なり合ふて日傘かな　鐵橋
○負ひし子の能く眠りたる日傘かな　白藤
○日傘さして邪寬がられけり繪草紙屋　懷光
○一二回三廻して見る日傘かな　鐵橋
○小流へ日傘車にする子哉　慶山
○繪日傘を置いて手合す清水寺　沿堤
○覗かれてはつと日傘をつぼめ蟲　山
○二　點
○○牡丹園日傘に輕き埃かな　旭哉
○○姥車押す日傘の人や帶赤き　白藤
○○大佛の下にあちこち日傘かな　懷光
○四　點
○○○○鐘供養野道につゞく日傘哉　懷光
○五　點
○○○○○守は睡り子は繪日傘と語りけり　歩牛
○
ね日傘の金短冊や八千代舞ふ　鼓城

### 生實濱逍遙團の花菖蒲を見る

睡蓮をおしわけて出る緋鯉哉　鼓城
紫菖蒲や中に一株狂ひ咲き　同
水濱々盡きぬ曉や花菖蒲　蹲
梅晴雨や紫白の牡若泰師堂　大森
朝露の濡色清し花菖蒲　蕉雫庵
水に富む濱野の里や花菖蒲　同

▲注　意　はちす會への投稿は其開會當日までの分に限り會の互選に提出します、期日に遲れたものは採りません。投稿先は東京淺草區北清島町統一閣

# 統一購讀料領收報告（前號續き）

（前號續き）

▲金五十六錢也
河木　九十郎殿
山岸　喜藤太殿
西島　安藏殿
麻殖生鍵三郎殿
井上　周殿
山下　鍵造殿
山田　直助殿
幸松　武雄殿
宮崎　久次郎殿
吉市　藤兵衛殿
山口　兵彌殿
内山　喜三郎殿
岩瀨　梅次郎殿
佐藤　宇平殿
岡田　憲隨殿
寶樂寺　森田殿
望月　本良殿
蛭田　禮孝殿
吉田　研壽殿
磯部　喜作殿
石井　信敬殿
望月　日正殿
松尾　一宣殿
植田　孝之助殿
稻浦　熊夫殿
吉田　愛太殿
森　日靜殿
佐藤　宜朗殿
岡本　米藏殿
横山　仁秀殿

金子　榮三郎殿
金子　幸太郎殿
井上　仙吉殿
石田　龜太郎殿
山形縣法久寺殿
小川　日真殿
藤田　甲子藏殿
關根　彌太郎殿
小倉　正恒殿
千浦　友七郎殿
土井伊右衛門殿
吉澤　孝順殿
荒木　鍵補殿
香月　鏡之助殿
高橋　安次郎吉
吉田　善之助殿

▲金五拾錢也
橫山　藤吉殿

▲金五拾壹錢也
中村　茂殿
赤塚　健殿
上村　龜吉殿

▲金五拾錢也
石村　義和殿
山本　富三殿

▲金四拾八錢也
南　穎祐殿
小宮　金藏殿
伊藤　勇次郎殿
河原　林藏殿
内藤　慶次郎殿
岸富　常吉殿

安藤　林平殿
吉田　顯正殿
吉田　いし殿
橫濱　甚之助殿
若松　八五郎殿
高橋　長二殿

▲金四拾六錢也
新豐　製袋太殿
松下　義與殿

▲金四拾貳錢也
白石　正己殿

▲金參拾九錢也
佐原　榮作殿

▲金參拾四錢也
山口　萬吉殿

▲金貳拾五錢也
岡本　瑞潮殿
高田　安藏殿

▲金八圓也
中村　鍵夫殿

▲七圓也
中村　謙藏殿

▲金五圓也
重松　玉治殿

▲金參圓五拾錢也
中村　謙藏殿

▲金貳圓也
栗田　庫太殿
渡邊　眞吾殿
吉良　鳳作殿
中須　半介殿

▲壹圓八拾四錢也

甲府法華會殿

▲金壹圓五拾七錢
村木　惠吉殿

▲金壹圓貳拾參錢
石橋　勘介殿

▲金壹圓拾錢也
久保　郁藏殿

▲金壹圓七錢
小林　法運殿
岡　繁也殿
槌田　孝玄殿
石神　丹藏殿
井上　清純殿
佐久間　良三殿
鈴木　嘉藏殿
鈴木　源次郎殿
諏訪　小熊殿
池田　重次殿
吉田　猛子殿
梶　峯殿
荒木　安兵衛殿
玉川　銀次郎殿
河野　榮太郎殿
戸田　彌吉殿
中村　誠二郎殿
鶴岡　岸之助殿
土屋　榮藏殿
增田　榮次郎殿
秋元　米藏殿
淺川　敏靖殿
野中　勝明殿
宮本　龜吉殿
米澤　逸三殿
木澤　範殿
西野　米藏殿

太田　重太郎殿
島本　格十郎殿
外松　孫太郎殿
天野　敬一殿
高槻　元俊殿

▲金壹圓貳錢也
木原　文靜殿

▲金壹圓也
三浦　顯孝殿
龍勢　藤太郎殿
藥師寺　基太郎殿
渡邊　英明殿
瀨戸　兵藏殿
原　百樋殿
世良　準平殿

▲金九拾九錢也
小高　常之助殿

▲金九拾七錢
山田　雄二郎殿

▲金九拾六錢也
中島　幸治殿
南峰　子殿
萩原　林三郎殿

▲金九拾五錢也
勝山　いし殿
笠目　善次郎殿
井上　充殿
金杉　慶次殿
伊達　五郎殿
宮川　近殿
石野　浩正殿
日下部　大助殿
福田　日鄕殿
片山　柳作殿

▲金九拾錢也

谷　日昌殿
柳下　久殿
宮田　伊光殿

▲金八拾一錢也
靜岡縣
松野村小學校殿
大井　五郎殿
中村　貫一殿
今關　清太郎殿
及川　倘純殿
小島　長之助殿

▲金七拾九錢也
岡島　揆殿

▲七拾參錢也
山本　倍三殿
石川　保平殿
富田　正太郎殿
山口　凱夫殿
石橋　傳七殿
出羽　新太郎殿
片岡　輔殿
風戸　仁平殿
綠川　了殿
西部　定吉殿

▲金六拾四錢也
佐々木　孝玉殿
金光　多三郎殿
白石　研輔殿
飯沼　德次郎殿
幸田　和助殿
進藤　きん殿
山川　端夫殿
清水　虎三殿
栗山　英智殿
奥井　兵作殿

熱田　榮助殿
木村　榮次郎殿
井上　文作殿
石井　宮三郎殿
小笠原　慈明殿
山崎　平五郎殿
結城　亮山殿
新田　日盛殿

▲金五拾九錢也
池田　龜作殿

▲金五拾六錢也
水沼　教會所殿
熊本川尻口日蓮宗教會殿
小杉　嘉三郎殿
柴田　嶺秀殿
坪田　良造殿
高木　豐房殿
吉田　惠隆殿
秋山　智照殿
布川　春義殿
齋藤　圓海殿
三笠　豐子殿
小林　日進殿
樑瀨　榮三殿
渡邊　勘吾殿
工藤　觀全殿
井口　富雄殿
都築　小六殿
佐藤　玄靜殿
圓頓寺　吉田殿
內山　榮次郎殿
長田　文次郎殿
妙源寺　功刀殿
池田　玄東殿

紫主　幸太郎殿
野々村　華堂殿
妙經寺　最上殿
小野田　武吉殿
妙祥寺　見山殿
中谷　元一殿
圓經寺　林殿
土屋　遵政殿
角田　堯現殿
常敎寺　佐藤殿
林　貞助殿
對木　せい殿
羽賀　惠之助殿
丹波內山醫院殿
山本　菊太郎殿
日澄寺　松野殿
加納　廣淳殿
小玉　常一殿
長德寺　大高殿
上阪　信殿
金崎　和吉殿
海關要三郎殿
谷田　清次郎殿
石井　智明殿
伊藤　早太殿
佐々木　者三殿
北岡　敎順殿
伊藤　寬明殿
福岡縣妙經寺殿
法泉寺　池田殿
牧　孝太郎殿
宇都宮　馬治殿
實松寺　梶原殿
登山　儀三郎殿
菊野　利三郎殿





永井兵左衛門殿
永井　直吉殿
妙榮寺　山邊殿
妙照寺　大町殿
本國寺　濱井殿
大法寺　中野殿
石田　太吉殿
妙國寺　石田殿
高濱　鴻一殿
寶德寺　中野殿
堀田　和次殿
田口　玄猶殿
安井　慎一殿
增田　松治殿
富下　直高殿
堀野　幸作殿
日蓮宗倶樂部米崎殿
橋口　竹三郎殿
本立寺　小堀殿
久遠寺　朝田殿
中馬　幸太郎殿
高見　忠藏殿
小玉　省一殿
佛成寺　竹內殿
上田　尙溫殿
妙傳寺　釋殿
武田　禮吉殿
東家料理亭殿
日蓮宗敎會所
木村　殿
石倉　圓妙殿
圓福寺　庭田殿
宇山　昌太郎殿
伊藤　又藏殿
見性寺　佐藤殿

妙見寺　山田殿
岩田　天龍殿
倉橫　菊太殿
佐藤　治兵衛殿
山口　富治殿
山梨縣　志村殿
島田治左衛門殿
木隆寺　鈴木殿
高橋　貫風殿
本能寺　石野殿
高見　蜜次郎殿
西尾　雄吉殿
河野　一郎殿
石橋　友次郎殿
柴岡　喜一郎殿
渡邊　宗一殿
今井　長之助殿
大久保　要四郎殿
山梨縣妙了寺殿
山村　伊助殿
藤山　英機殿
山崎　鶴之助殿
松井　日等殿
景山　佳雄殿
望月　小太郎殿
山崎　順一殿
山形　妙德寺殿
柴明殿
畑日與殿
武田　齋藤　郁郎殿
赤羽　礒太郎殿
赤地　龜太郎殿
諏訪　蓮澄殿
別所　小三郎殿
眞淨寺　宮川殿
赤澤　日雄殿
德島　圓隆寺殿
高知　妙國寺殿

大和　久稻作殿
木村　信太郎殿
鶴岡　寄次郎殿
笠見　音太郎殿
三木　仙藏殿
山崎　信一殿
千葉　清殿
安藤　久太郎殿
道驛　淺次郎殿
石原　俊一殿
石橋　友次郎殿
河野　一郎殿
川村　爽太郎殿
片山　新之助殿
淺井　常敬殿
萩原　芳明殿
山縣　近吉殿
小牧　自然殿
稻葉　榮之助殿
長井　卽眞殿
日等殿
松井　佳雄殿
橫山　治三郎殿
石田　羊一郎殿
卜部　喜太郎殿
岡部　三藏殿
守谷　末吉殿
近江　正端殿
永島　巖殿
森田　洪殿
山口　彈正殿
佐藤　豐太郎殿
前刀　寶清殿
播磨　木藤殿
眼部　新五郎殿
齋藤　鑑之助殿
今關　社次郎殿

石原　應恒殿
早川　敬殿
西山　鑛次郎殿
堀田　正必殿
大橋　永萬殿
及川　眞能殿
笠原　幸之助殿
川合　芳次郎殿
瀧口　牛助殿
北原　觀郎殿
龜谷　日了殿
柴岡　喜一郎殿
渡邊　宗一殿
今井　長之助殿
大久保　要四郎殿
山梨縣妙了寺殿
山村　伊助殿
藤山　英機殿
卽眞殿
山崎　順一殿
山形　妙德寺殿
榮明殿
畑日與殿
武田　日鄕殿
齋藤　郁郎殿
赤羽　礒太郎殿
赤地　龜太郎殿
諏訪　蓮澄殿
別所　小三郎殿
眞淨寺　宮川殿
赤澤　日雄殿
德島　圓隆寺殿
高知　妙國寺殿

佐藤　海豐殿
繁富　久遠殿
加藤　末藏殿

▲金五拾壹錢也
一妙寺　森上殿
馬淵　金市殿

▲金五拾錢也

王樹院　中野殿
青木　龍雲殿

▲金四拾八錢也
宮山　直治殿
大靈　三郎殿
鈴木　辰次郎殿
久世　卯三郎殿

渕路　最明寺殿

▲金四拾七錢也
小倉　銀藏殿

▲金四拾錢也
柳下　重勝殿

▲金參拾九錢也
今岡　榮殿

岸田　庄藏殿

▲金參拾四錢也
山口　萬吉殿
圓敎寺　丹羽殿

▲金八錢也
福島　正之殿
以上

# 大藏經要義

隔月發刊十八卷完結

井上博士叙　姉崎博士論文
佐藤中將序　本多大僧正撰述

洋裝菊版上製三方金箔入
每卷四百頁內外
正價壹圓八拾錢
送料拾貳錢

年分前金五圓
半年分前金九圓
壹年分前金一圓
共ニ送料不要

## 卷二發刊

守護國界主經　十卷
優婆塞戒經　七卷
阿含經　一卷
心地觀經　七卷
阿含正行經　一卷
大薩遮尼乾子經　十卷
月上女經　二卷
仁王護國經　二卷
寶積經　一卷
那先經　二卷
勝鬘師子吼經　一卷
大法鼓經　二卷
首楞嚴經　十卷
姉崎博士附錄論文

## 卷一目次

目次



（同好者に購讀御勸誘被成下度候）

# 第三卷出でん

慶應大學教授 マスタオブアーツ 柴田一能先生著

## 大正青年と日蓮主義

代一冊壹圓 送料八錢

清水龍山師著

## 眞日蓮僞日蓮

代五拾錢 送料六錢

## 圓頓章講義

四十五錢 送料八錢

統一編輯所取次

日蓮聖人御親寫

## 貞觀政要

甲種 縦一尺一寸横七寸約百頁桐箱入 玻璃版上等鳥ノ子紙別織金襴表裝 (特價金拾五圓也 (送料共))

乙種 縦一尺一寸横五寸百四十頁塗箱入 金屬版鳥ノ子紙別織緞子表裝 (特價金八圓也 (送料共))

割拂を諾す

東京市小石川白山前町

取次 統一編輯所

振替口座東京三三五三三番

堀文學士著

## 美術上の釋迦

正價壹圓貳拾錢 送料拾貳錢

## 日蓮聖人御遺文

皮表裝、上下金押 正價貳圓 内地送料拾貳錢

本多日生師著

## 聖語錄

四版 壹圓(郵税八錢) 四版 特製 壹圓參拾錢

## 縮冊法華經

開結

再版 貳拾八錢 (印刷値上に付) 郵税六錢

訓譯 妙法蓮華經 並 開結 全

一冊五拾錢 特別壹圓 郵税六錢

和譯、總ふりがな付なり

本多日生師著

## 軍人精神

代價郵税共 金四拾壹錢

本多日生師著

## 壽量品講義

代價郵税共 金五拾錢

本多日生師著

## 釋尊の八相成道

一冊郵税共 拾貳錢(小冊)

本多日生師著

## 破佛論を辯ず

一冊郵税共 金七錢(小冊)

大僧正本多日生上人題字 大僧正嶺村日正上人講述

## 日蓮上人之本尊

定價七拾五錢 郵税八錢

## 統合大講習會講演集

定價壹圓五拾錢 郵税拾貳錢

## 開目抄 (縮冊)

一冊郵税共拾貳錢

小橋昭了著

## 法華經大要講義

一冊郵税共特價七拾八錢

松尾蕉城 小林鷺洲著

## 投入と盛花

驚くかなれ 急ち十一版

代郵税共壹圓

東京市小石川區白山前町

賣捌 統一編輯所

振替口座三三五三三番

●書冊問合せは往復ハガキに限る●


本誌『統一』定價並に廣告代價

○一冊八錢。郵送分は別に五厘申受候

○前金送金分に限り郵送料申受ず候

○代金未濟の方へは六ヶ月目乃至一ヶ年目毎に御便利上集金郵便差上ます(但此場合郵便局手數料五錢加算仕るべく候)

○故に郵便送り當方より集金のものは半ヶ年五拾六錢、一ヶ年壹圓七錢申受候

但し一ヶ年讀者の方より御送金は九拾五錢にて宜しく候

●送金は振替貯金口座東京三三五三三番統一編輯所に御拂込を乞ふ(もよりの郵便局にて御拂込み下され度、確實に御座候)

●小爲替は紛失のおそれが有ます

●領收證は特に御請求以外は本誌上に表として取纒め掲載します

●廣告料は一頁特別十五圓。半頁八圓五拾錢。三分一頁六圓。

▲五號活字十八字詰一行二拾五錢

●交換及び義務廣告はお斷り申候

▲御注意

●多數中の事に付若し雜誌不配達の節は御一報を乞ふ、早速御送本可仕候

●當方より集金郵便差上候節、多數の事に付計算相違、又は二重御請求等の手違ひ候節は御面倒ながら御一報下さる度願上候

●集金郵便差上候節、何かの御都合にて御拒絶の方も有之候。左樣の節は其儘御放置なく葉書にて一寸其旨御一報下され度、引續き御送本申上候。又御拒絶の後は不用の節も一寸御一報下され度、早速蜜帳併せて送本を中止仕るべく候

●多數の事に付御返事は往復はがきの以外は御返事仕らぬ場合可有之候

●諸君の熱心御力に依り我統一が宗教雜誌界中に於て最大の多數の發行中に數へらるゝに至りしことを謝し申候



轉住廣告

(轉住地) 東京市外品川町南馬場本榮寺

梶木日種

(轉住地) 愛知縣豐橋市清水町妙圓寺

松本堅晴

日宗法衣專門

青雲帽 帛紗服 袴

飯田法衣店

京都市佛具屋町五條北

振替口座大阪六八四七

定價表八御申越次第何時までも御送申上候

●位牌木魚卸小賣

●御來店之節ハ陳列場ヘ御來車被下度是迄ト一層勉强仕リ

●佛具一切陳列仕置候●

各本山御用達 佛像佛具一切卸小賣

定價表郵税四錢

小賣部 京都三條小橋東入南側

三法堂佛具陳列場

長距離電話中貳七八參番

振替口座東京貳〇七壹 大阪四貳五九

卸部 京都市三條通小橋西入

本舗 三法堂 藤田總治

▲三版出來○○○

●卿は全國の新聞の批評を見しや

△本書に對する△

大僧正 本多日生著

法華經講義 全二冊

▲洋裝菊版總布上製函入美本

上卷 壹圓八拾錢(壹千頁)

下卷 壹圓八拾錢(壹千頁)

●各券分賣す

●二冊の小包料(內地二十錢、滿洲朝鮮五十錢 臺灣樺太四拾錢)

●一冊の小包料(內地十二錢、滿洲朝鮮四十錢 樺太臺灣三十錢)

大僧正 本多日生著

第一版、二版三版忽ち賣切 五版

日蓮主義

三五判洋裝金文字 ▲天金絲 函入美本 ▲紙數六百二十餘頁 ▲定價九拾五錢 郵稅六錢

▲宗教の必要と其撰擇 ▲神儒佛三教と日蓮上人 ▲國民道德と宗教の信仰 ▲破佛論に對する批判 ▲統一的佛教觀 ▲釋尊の出家成道 ▲佛教信仰の體系 ▲法華經審量品 ▲日蓮主義の梗概 ▲終法次第 ▲方便法 ▲自我偈 ▲自調 ▲本統龍文要文

●賣り切れざる中に申込あれ

申込所 東京市小石川區白山前町 統一編輯所 振替口座東京三三五三三番

布田

眼藥 血の藥

當藥王寺『目藥』『血の藥』製藥の儀、前住職中田日達師遷化後久しく製藥を中止候處、先般齋藤日章師住職拜命四月一日より從前通り製藥販賣致居候間此段謹告候也

大正六年七月

上總山武郡源村上布田

眼藥 血の藥 本舗 藥王寺

振替口座東京六七九一番

追て藥王寺住職齋藤日章の名儀外は總て拙寺の製藥に無之候間順て何等の責任を負はず候

念珠 念珠

日蓮各宗本山御用達

京都市寺町通六角西南角

念珠商 安田商店

振替大阪三四二一五番

二百數十年日蓮各宗の念珠を商ひ來り候老舗に候御信用の上御用命願上候

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木

(直に御聯想下され候儀に候)

京都 三條通烏丸東入ル町

草木本店

電話中七三五番

振替口座東一一五五九番

東京淺草區三好町二番地

草木支店

電話下谷三四三四番

振替口座東二四五六八番

●●苟も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●●

佛像佛具 位牌木鉦 調度所

宮殿幢天蓋其他一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈

總本山身延山 總本山妙滿寺 大本山本國寺 日宗各教團 御用達

京都寺町四條南大雲院前

舊名『乾清』事 大佛師 辻井岩次郎

振替大阪八一五七番

電話下三二五八番

多少に限らず御用奉願上候也

●●御用仰せ被下候はゞ叮嚀深切を旨と致候●●

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可 大正六年七月十五日發行(毎月一回十五日發行)

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

▲本誌事務取扱所 東京市小石川區白山前町統一編輯所 發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎 △印刷人鈴木日雄 (▲本誌定價一冊八錢郵稅五厘▼)

(東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舍印行)

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可 大正六年八月十五日發行(毎月一回十五日發行)

第廿一年 統一 八月號

# 統一

(第二百七十號)

課題和歌『法師』發表……子爵 清岡長言選
この法、この國……(一、二)……主任記者
理想の統一……(九)……文學博士 箕作元八
日蓮主義を通して見たる慈愛……小笠原 丁
五種の妙行……(一四)……秋葉純一
機微譚語(石板の書法、竹皮の辨當)(一五、一六)山根青村
日蓮聖人の御遺文より探り求めたる
釋迦牟尼傳……(一七、一八)……松尾皷城
謠曲中の法華經(八)……(一八)……戸水萬頃
師恩報謝を忘れるな……(一九)……大津日文
祖師日蓮聖人御傳各宗渉獵のつゞき……一記者
佐藤中將講話。本多師の奮鬪振り。勞働者慰安會。
統一團報。統一俳句
農民精神の頽廢と日蓮主義……熊城生

諸經に顯れたる讃佛偈……(自三至八)……大僧正 本多日生

發行事務取扱所 東京小石川白山前町 統一編輯所

◀振替口座東京三三五三三番▶